

婦人止子毛



第二卷
第三號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書振假名附のこと。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざること。
- 一、封書の表には、凡て婦人ど子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行 毎月一回五日發行 ○第一卷第一號明治廿四年一月二十日發行

定價 一册金拾錢 ○六册前金五拾七錢 ○拾貳册前金壹圓拾錢 ○郵税各一册一錢 ○切手代用は壹割増但壹錢切手に限る。

入會者 は會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會あて申し込まれるれば雜誌は無代價にて送呈すべし

購讀者 ば總べて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこと ○送金は神田今川橋又は日本橋室町郵便取扱所受取入金昌堂あてのこと ○見本は切手二錢に限り十二枚封入にて申し越されたし ○前金相切れ候節は赤にて御姓名の上にて附し候に付き早速御送附下されたく御入用なき時は御斷り下されたく候 ○轉居の節は新舊共に御通知を乞ふ

編輯 に関する御照會及原稿御寄贈はすべてフレーベル會あてのこと

廣告料 一頁十圓半頁五圓

明治三十五年三月二日印刷
同 年三月五日發行

不許複製

發行所 東京市本郷區元町二丁目六十六番地
編輯者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
印刷所 東京市日本橋區本石町三丁目三十三番地
發行所 東京市日本橋區本石町三丁目三十三番地
發賣所 東京市日本橋區本石町三丁目三十三番地

大賣捌所 東京東京堂 ● 同東海信文合資會社 ● 同北陸館

婦人と子ども第二卷第三號目次

子ども

骨ものがたり。獅子がり。無言の學士會。紙の摺み方。一口ばなし。考へもの

家庭

いろ／＼の子ども……………松村久子
昔いろは料理……………石井泰次郎
袖無羽織……………岡本ちか子
或母の日記……………無名氏

學術

動物の生活に是非必要なもの……………東海

史傳

津崎矩子……………下村三四吉

文苑

はるさめ會連句……………ろす
少女子……………小林恒
竹柏園歌會兼題……………佐々木信綱外
和歌四首……………静子、さくら
俳句數十首 長野盲人學校の俳句……………

説林

男子の貞操……………前田長太
婦人の修養……………
保育法改良の第一着手……………
教育家の理想……………

寄書

大に女子の反省を求む……………香川縣 大西永太郎
婦人の心得……………三河 近藤とき子
幼者の教導につきて……………東京 和田くら子
政さんの觀念界……………長野 飯島八千溪
植物と子どもといふを讀みて……………四日市 中澤よし子

雜錄

三月の天地……………かま
玩弄具及遊技の話……………關根正直
雛祭りの記……………せ、野本生
結婚論……………さ、く
いろ／＼……………ら

彙報

學事集會●筆の筆●地方通信●東京通信●新刊紹介●會報

婦人と子ども

第貳巻第參號

明治三十五年三月五日



(本欄は凡て轉載を禁ず)

骨ものがたり

やまとの翁

さても、むかしくある山おくに、一匹の大きな
 野猪がすんでいましたとさ。所が、この野猪 毎晩
 毎晩、村にでてきてわ、畠をあらしたり、牛や馬を
 とって食ってしまったり、おまけに 家の中までは

入いってきて、人ひとにまでもくつてかゝるとゆゝ風ふうです
 から、さゝ村むら中なかが大騒おほさわでもつてこの事ことを殿との様さまえ
 届とけてでました。

殿との様さまわ、だんくとと其譯そのわけをおきまになつて、はて
 さて難儀なんぎなことができたものだ。こ覺おぼしめされた
 ですから、そこで早速さつそく、その野猪いのししを殺ころして出でた者ものに
 わ澤山たくさんなご褒美ほしびをくれる、とゆゝお布告ふこを村中むらなか
 え出ださせました。

けれども、恐おそろしいものだから、誰たれも殺ころして出でる
 者ものがない。野猪いのししのあれるのが前まえよりも尙なほ烈ひどい。村むら

の一人わ 一夜も安心して寝られる晩がないとゆー大騒ぎになりました。

そこで、殿様もよくくお考をきめられて。こんどわ次の様なお布告を、村中え配らせました。

『野猪を殺して村中の難儀を助けた者わご褒美として殿様の後繼にしてくれる』

こんな甘い話わ又とあるものでない。けれども誰一人 野猪を退治して一村の難義を助けよーとゆー人がありませんでした。

しますと、此村の外れに 兄弟の獵師が住んで

居ました。兄わ猛夫といって、身体も丈夫で、力も強いことわ強いのだが、いけないことにわ、心がねぢくれておって、意地悪の我儘者である。弟の方わ美彦といって、兄ほど強くわないが、心が優しくつて、そしてまた、至極おとなしい、よい子であつた。ある晩のこと、この二人の兄弟わ、どこかであのお布告をきいてきて、猛夫が美彦にゆゝにわ、

『な、美彦、面白いじやないか、あの野猪を退治する、と、殿様の後繼にして下さるとゆゝのじや、あ、面白い、面白い、ど、だ、一番退治にでかけよ、じや』

ないか。』

すると美彦わ

『そーですとも、なんでも大勢の人の爲になること
ですから、一ひとつ奮發ふんぱつしましよー』

『うん、そーか、でわこーゆーことにしよー、この
兄あにかえらいか 夫それとも弟あとうがえらいか 一いち番ばんに野猪いのししを
退治たいじした者ものがえらいこととして 二ふた人たりでかけをしよ
ーじゃないか』と猛夫たけおがいーだしたものですから、
美彦よしひこも『それわ面白おもしろかるー』とゆーので すぐすぐに相談そんたん
がきまつて、猛夫たけおわ 其晩そのばんすぐ支度しどをして 山やまの奥おく

えとわけ入りましたが、美彦わ翌日の朝になつてから態と途を違えて、これも同じく奥山さして出かけました。

それから美彦わたゞ一人深い山道をたどりながら、おくえくと分け入りました所、不思議なるかな、眞白な鬚を一面に生やした老翁が忽然と出て來ました。

『これくお前わ、今から野猪退治にでかけるのだろ、あれわ大變な古猪だから、とても尋常では退治が六かしい、私が今弓と矢とをあげるから、これ



で射て取れば 先づ大丈夫だ』

といーながら、老翁わ弓に一本の矢をそえて美彦にくれて置いて その儘どこともなく 消えてしまいました。

美彦わ、はて、不思議なこともあればあるものだな と思いましたが、これこそ日頃信心せる神のお助けに違ない これでわ野猪を退治することも疑ないど心勇んで、なをく奥深く分け入りました。すると忽ち 向の方からして 一陣の盲風、ピューとばかり、木の葉をまいて吹いてきたかと思うと、ど

こから出てきたのか、小牛の様な一匹の大猪、鼻を
 ならし、牙を怒らし、木ともいわず、石ともいわず
 あたるにまかせてなげ上げながら眞一文字に飛び出
 した。

『それ』と美彦わ 一歩下って身を構えたが、名に
 負一 幾年経たのか知れぬ 古野猪の事だから、身
 体丸で 石の様に硬まつて居て、とても一様の仕
 方で、矢でも玉でも通るものでない、美彦わ、心
 の中で一生懸命に、前の老翁を念じながら、弓を満
 月の様に引つ絞った。猪わ それと見て疾風の如く

美彦目がけて突き進んで來たので、こゝぞと一息に切つて放つた所、誤らず、勢込んだ大猪の額の眞たゝ中を射通したから、たまらない。さしもの古猪も牛の様な、うなりごえを上げて、其儘其場に斃れて死にました。

獅子狩り

やまとの翁

此間から上野の動物園へ、獅子が見えたといふので、皆から「連れて行つて見せて呉れ〜」と毎日の様に、せがまれたけれども、とても行つたからとて、人で見られもしまい、殊に、年寄が子供をつれて人込の中に行くのは、危いものと思つたのである日曜日朝、「それなら今から面白い獅子狩りの話をしてやらう」といふと、話し好の子供らの事だから、「お老爺さん、獅子狩りの話して〜」？「面白いの」？と叫びながら、皆一度に翁の膝え詰めかけて來たので、翁は例の通り、先づ悠然と一服喫かしながら、次の様な話しを出したことである。

「獅子の話は 昨年あたり婦人と子どもといふ雑誌に出たからも、皆が知つて居る筈、何しろ、前脚で一つ撲ると、牛や馬の様はあんな大きな獣の頭でも忽ち摧けて仕舞ふ位だから何しろスパラシ一力といはんければならぬ。だから獅子狩りなどは、どうしても狩りの中でも、一番危い仕事に違ない。

今から話しをしようといふのは、リ井ングストン——あの名高い暗黒世界——亞弗利加の探検家のリ井ングストンが亞弗利加滞在中の獅子狩りの話なのだが、其話はこゝなのである。

或時リ井ングストンが滞留つて居つた所の村へ時々獅子が出て來て困つた、どーも夜になると、不意に牧場へ飛び込んで來ては、牛を殺す、羊を捉つて行く、そこでリ井ングストンが土人に忠告

した。

「一体獅子といふ獸は一匹さへ殺して仕舞へば残りの者は、大低夫を知つて皆其場所を逃げて仕舞ふから、どーだ、今から一つ獅子狩りをやつて一匹殺さうじやないか、己が一番先きに立つから。」
 そんならといふので、土人ども（亞弗利加の黒坊だよ）は、そー、彼れ是れ二三十人も集つて來た。そこで、リ井ングストーンが大將になつて、愈々獅子狩りに出懸けた。」

「それから……」

「それから。」「それから、どーしたの？」

「それから、だんく行つた所が、獅子どもは、凡そ四五町先きの、樹木の一面に生ひ繁つた、小山の岩の間に隠れて居るといふので、皆で以て其山を取り巻いて、だんくと遠巻にして攻め寄せ

た。

「暫らくすると、一人の黒坊が忽ち一匹の獅子が岩の上に座つて居るのを見附けたもんだから、ズドーンと一發やつた所が、ねらひ外れて、丸は岩に當つて、火花の如くに、岩は碎けて飛んだ獅子はいきなりふり返つて つッ立ち上りさま、丸の當つた場所に噛み附いたが、忽ちにして樹立深さ所へ飛び去つて仕舞つた。」

暫らくすると、今度はリ井ングストーンが、又一匹の獅子を見付けたが、恰前（ちやうぜん）のと同じ様な位置で距離は其處から、九十尺許りと見たから、猶豫なく二ツ丸を飛ばした。が、當り所は急所を外れた。

から堪らない。猛然として獅子は立ち上がったと見たが、忽ち丸食ひ獅子の本性を顯はして、

所謂獅子奮迅の勢で以て、リ井ングストーンに飛びかゝつて、彼が今や第二發の丸を込めやうとして居る所へ、いさなり飛び附いて其肩を噛へながら、丸で犬が鼠を噛へた様な鹽梅に、二三度烈しく振つて恐ろしく耳元でうなつた。そこでさすがに剛氣のリ井ングストーンも忽ち氣絶して人事不省に陥つた。

大勢の土人どもは、此有様を見て居つたが、どしも仕様がない、たゞ「ワ〜」といつて騒いで居つた。中にも一人の土人は、近く寄つて銃を向けたか、之を見るや否や、獅子は、リ井ングストーンを捨て置いていきなり其男に飛び附いた。今一人の土人は鎗を以て、獅子に突きかゝつた所が獅子は同じく此男の首に飛び附いた。

けれども、前程からの立ち廻はりが、あまり烈

しかつたと見えて、さすがの手負ひ獅子も、鎗を以つた男の肩に爪を突き立てたなり、とうとう轉げて死んで仕舞つた。

リ井ングストーンもやつと危い所を逃れた。けれども、獅子に噛み附かれた所は、大變な大怪我で、丁度肩から腕へかけて、十一の齒傷を負はされてあつたぞうだ。然し夫でも、前から用心して行つて厚いジャケットを衣て居つたから、まだしも其傷は烈くなかつたといふことだ。

今まで黙つて聞いて居つた子供等は、此時一度に、「夫でお終ひ」？「あ、面白かつた」「お老爺さん、上野へ獅子見に連れてつて下さい、行きたいな〜」。

無言の學士會

小島松之助

昔々、波斯國のアマダンといへる市に、名高き學士會あり、其定員は常に一百人にして、其會の規定、第一條には、

「會員は多く考へ。少なく、記述し。且、沈黙なるべし」とあり、人々、之を呼んで、無言學士會といつて、當時波斯に於ける學者にして、此會に入會せんと希望せぬものはなく此會の會員となるは、非常の名譽であつたそです。

或る時、ドクトル、ゼーブと申す當代第一流の學者が、此無言學士會に、一人の欠員を生じたを聞きつけ、入會を請はんと思ひ、遙るく、アマダンにまゐり、其會員の集まれる學院の門口

を叩き、名刺に「ドクトル、ゼーブ、が入會を請ふ」と書り、會長に通じてくれと門番に頼のみました、門番は直に名刺を會長に通せしめ、如何せん、時既に後れ、もはや、欠員は満員となり居りたれば、此無言學士會は、此聰明、識達なる學者ゼーブを拒絶せねばならなかつたのです。

そこで、此入會拒絶の旨はゼーブにどんなにして無言で答へるべきかにつきては流石の會長も稍當惑いたしました。暫く考へた後、會長は大なる杯に一ぱい、水を入れ、最早其上一滴でも入るれば洩るゝまでに満々と盛り、そふして、手眞似をなして、入會候補者を招き入れしめました。ゼーブはいとも質朴なる服装にて、無造作に入り來つた、そこで會長は起立し何んとも一言も發するとなく、いと氣の毒げなる目くばせして、水を

盛りたる杯さかを示しめしました。ドクトル、ゼーブは直すに學士會がくしかいは既に満員まんいんとなり居るを悟さとりましたが、尙なは失望しつぱいいたしませずして、たとへ、定員ていゐんを越こへて已おのれ一人入會いちにんにうかいを許ゆるした所で、少しも差支さつかはなからうといふことを説ときつけやうと思おもつて、偶々たま、足あしもとに、薔薇ばらの一葉ひとはの落ちたのを見みつけたもんですからすぐ之これを拾ひろふて、杯水はいすい一滴てきもこぼさない様に、静しづかに杯水はいすいの上うへに浮うかばしめました。此敏達このびんたつなる返答へんたうにより、一同いちどう、皆みな、知らずく拍手歡迎はつしゅかんげいいたしまして、百人ひゃくにんの定員ていゐんを犯かして、ドクトル、ゼーブを入會にうかいせしむるを一致いちじいたし直すに會員名簿かいゐんめいぼを出だした、此名簿このめいぼには新入會者しんにうかいしやは自ら署名しごめいする定めでありましたから、ゼーブも直すに筆ふでをとつて自署じしよいたしましたが、尙な、例れいにより無言むげんにて入會感謝にうかいかんしゃの意いを表あらはさねばならなかつたので

す。

實じつにゼーブ氏は此無言學士會員このむげんがくしかいゐんに對たいして、無言むげんにて感謝かんしゃをいたしたのです。即すなはち、白紙はくしに(100)と書かき(之これは在來ざいらいの同胞會員どうぱうかいゐん、一人ひとりの意いを寓ぐしたのです)次に其左そのうだりに0を書かき加くはへ100)とし次の如ごとく書かきました。

(0100)

「其價值そのちやちは更に増減ぞうげんすることなからん」

會長かいちやうはいと丁重ていぢゆうに泰然たいぜんとしたる体ていにて筆ふでをとり直すに。

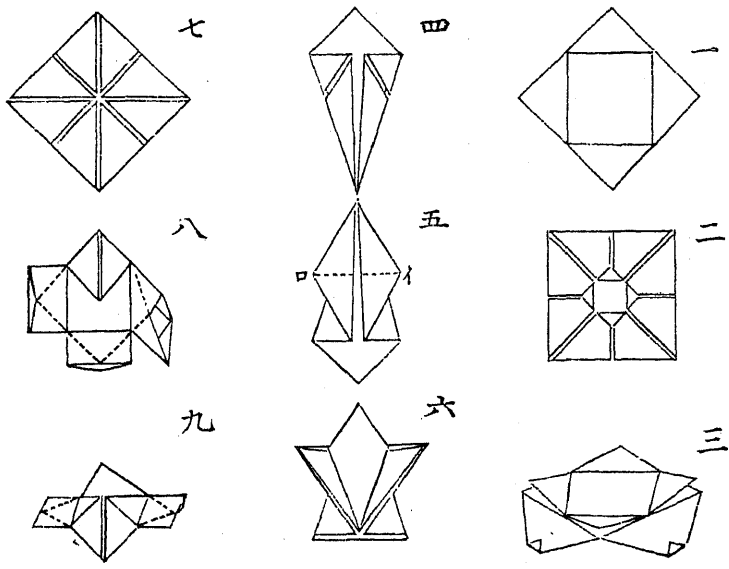
(1000)

「其價值そのちやちは此これより十倍じふばいとなるならん」

と書かきて答こたへましたといふことです。

摺み方

今度の摺み方は、前のついででございます、
 やはり先づ四角な紙の四つの角を、まん中に集める
 のです、そして小さな四角になりましたら、又
 同じよりに裏の方へ折つて、なを小さな四角にし
 まして、始め折つた方を、一圖のよりに折りかえ
 し、二度目に折つた方を、二圖のよりに折りかえ
 してこれを脚にして、立て、花籠にいたします。
 次ぎは福助でございますが、これも四つの角を
 まん中へ集め、又同じ方へ同じよりに折つて、小
 さな四角にし、次ぎにその二つの縁を、四圖のよ
 りに折り、裏にかえつてある所をひろげて、五圖
 のよりにし、次ぎに「イロ」の線の通りに折り、又
 「ハニ」の所を折つて 中に入れ、六圖のよりにす
 るのです。



その次ぎは襦袢で、これも亦角をまん中に集め、又裏の方へ同じよりに、又その裏の方へ同じよりに折り、七圖のよりにして、その「イロハ」の三つの所をひろげて 八圖の「イロハ」のよりにし、襦袢にいたします。

又その次ぎの折り方わ、襦袢の通りですが、ひろげる所を二ヶ所にして、他へ二ヶ所を 九圖のよりに立て、車にいたします。

一口ばなし

▲旨の按摩が、暗の夜の暮れ方、或家へ灯燈を借りに來たので、『旨の癖に燈りを何にするのだ』と云ふと『なーに、目明さが衝き當るといけなから』といつた。そこで、なる程と感心をして借して呉れた。

▲其旨が、灯燈を持つて 歩いて居て、暫く行く、向ふから、人が來て、イタイといふ程衝き當たので大に腹を立て、『目明さの癖に、旨に衝き當るとは、お前さんもよく〜間拔けた、此灯燈が目に入らないのか』といつて、きめ附けた所が、『なんだ、火の消えた灯燈を持つて歩いてるでないか』

▲一人の鬘の紳士が 獵銃を肩にして、さも心配らしく、獵から歸つて來る處へ、其の友達で、これも、鬘の先生、例の通り、遠方から大きな聲で、『やー、お歸り、何か取れましたか』すると獵の先生が、さも方なさそーに『オー、君、今日は大變な失敗で、たつた今玉を外らして、人に當てね』『や、そーか、夫をツケヤキにすりや、甘いな』

考(もの)

前號に出たのは、『春日大明神』

この次は

『皆さん、私は大抵石の中に隠れて、眠つて、居ますが、鐵に遇ふと起されます、私は、始は極小さな、弱い、丸で力のないものです、左様さ、皆さんの細い氣息にでも負けます、一滴の雨にでも叶ひません、併しそれでも、若し私の兄弟分が味方に附きますと、どうでしょう、天下敵なしです』
皆さん、これな！に！！！！

愛讀諸姉の一人から、次の様な懸賞考へ物が出ました。考になつた方々は、ごーです、やつてご覧なさい。

- 一、十七を二分して農夫必需品
- 一、十六を三分して日本國內の國名

一、十五を二分して人体中の一名稱

一、十三を二分して女子必需品

一、八を二分して獸類の名

右五題共悉く解答者には、聊か景品を差上げます、若し正解答者のない時は、一題でも解せられた御方に景品を廻しますから、購讀の諸子様御熟考の上、早々解答紙に郵券三錢一葉封入御申越なさい。切期日の翌日景品發送す經日通知のなご方は没書と心得下さい、景品に制限がありますから成るべく早いのが宜しい。

切期日 四月一日迄

解答紙 隨意

字体 階書行書にて明瞭なるを要す

申込所 三河國西加茂郡筋生村字黒笹

近藤とき子宛

家庭



いろ／＼の子供

ひ　　ご　　子

まだ何色にも染まつて居らないままで白色のやうなきれいな子供の心を、黒くも、赤くも、茶にも、紫にも染めるのは、果して誰の手でございませうか。人の性は善であるとか、悪であるとか、遺傳とかいふ六かしの議論はしばらくおきまして、とにかく子供の心といふものは、割合にまじりけの少ない美はしいものでございませう。それ

に、實際はなか／＼いろいろでございまして、人の心が面のやうにちがふと同じことで、子供の心、行も實に十人十色で、皆それぞれちがつた色をもつて居ります。之は皆、染める人や、染料や、染方や、乾き方がちがふからでございませうが、子供の心の染まつたのは、縮緬を染めなはしたり、模様をぬくやうに、容易にはまゐりません。して見ると、子供を教育する母、家庭、幼稚園、學校、社會は、實に一分一秒も其注意を怠ることはできません。少しも油断ができません。

こういふことは、もとより知れきつた話ではございますが、私は先日染め損つた絹を染めなはして好い色にしたのを見まして、あゝ子供はこういうふわけにはゆかない、とつく／＼思ひましたものですから、そこでこういふことを申出したので

ございます。さて、これから、殆ど純白に近いのやら、もはや色々な染まつて来たのやら、子供の色々を擧げて見ませう。但し幼稚園時代の幼児でございませう。

ある子供は、子供不相應に大人の顔色を読みまして、物事にかくしだてをしたり、偽を言つたりいたします。其原因をたづねましたところが、全く其家庭にあまりきびしく此子を叱る人が一人ございまして、それがかわいそうだといふので、一人の人は、何時でも其人に秘密で、此子をすかしたり、物を遣つたりしてかわいがる、といふことでございます。

ある子供は、又誠に情の激する質で、笑ふのも、泣くのも、怒るのも、まるで氣むづかしい大人のやうで、怒り出すといつまでもうらめしそくに、

むし〜と腹を立て、居るのですが、此子の父親は芝居の世話方でございまして、此子はつひ毎日芝居にあそびに行くので、其身振、臺詞を上手にまねること、泣いた、怒つた、人を斬つた、笑つたなど、くはしく話をするには驚くばかりでございませう、此芝居見物は、此子の性質を前のやうにする一大原因ではございませうか。

ある子供の家庭は、誠に春のやうな温かい空気が満ちて居るらしく、いかに、むつまじく楽しく暮して居る様子でございませうが、果して其子は實に子供らしく、天真爛漫で、邪なところは少しもなく、おそろく生れたまゝにきれいで、悪いところは少しもまじつて居らないやうに見えます。

ある子供は、又、筋肉がたく太りまして、腕力で人に抵抗することが強く、至て強情でござい

ますが、其父母はいつでも此子を叱るのに、すぐ体罰を用ふるそうで、しぼつたり、打つたり、投げたりするといふ話でございませう。随分無茶なこととでございませうが、此子の腕力と強情は、多分此体罰濫用の結果でございませう。

ある子供は、調子はづれて滑稽者で、何とも言はれない妙な動作を始終いたしまして、人が眞面目で言ふことも、まるで滑稽のやうに聞き流しますが、之は全く其家庭に多くの小僧が居りまして、毎晩なぐさみ半分に此子をからかつて、おもちゃにするといふことが、原因らしいのでございませう。

ある子供は、一寸見たところ、まるで小さい老女のやうで、其起居動作の静かなこと、言葉の大人らしいこと、遊の不活潑なこと、どうしても子供とは見えません、之は其家庭の一人の老人が、

此子を行儀のよい、しとやかな女にしようといふので、一から十まで小言を言ひ、一寸よこずわりをしても、足をひねる、といふ風に、骨を折つてしつけた結果のやうでございませう。

今昔いろは料理

石井泰次郎

(わの部)

若布まきいも拵へやう

さつまいも生にて切りたして、輪切にして、皮をむきて、わかめのゆでたるを以て、板の上に乾き葛粉かうどんの粉をふりかけて、一面につけて、いもをまきて、いとにても、竹串にても、そつととめて、巻めのはぐれぬやうにして、鍋に入て煮るなり。

是はさつま芋、ながいも、自然薯にてつくる。

わらび漬のこしらへかた

蕨のやはらかさを、穂先の方ばかり、土つきたる軸の方を去りて、よろしき方を、鹽と灰をまぜたるを桶に入れて、其中につけおくべし。

さてつかふ四五日前に取出して、水に浸しおき、

四日後につかふ時、よく灰を洗ひ去りて、あつき湯をそゝぎかけて、つぎに椀もりなどに用ふべし。

わらびめしたきやう

わらびの莖わかき時、とりて細かにさざみ、灰湯につけて、よく煮て、後に水にとりて三日ばかりひたしおき、ゆりてさよく洗ひて、ぬめりを去り麥飯の中などに合せて、たくべし。

黄檗豆腐の拵へやう

豆腐かためにつくりたるを、上下より板をあて

いおしをして、水を去り、かたくなるを、玉子焼なべにて、醬油のつけやきにして、小口切にして出すべし。

袖無羽織

岡本 ちか

三四歳位までの子供の羽織は、普通袖無となす、これ袖のあるものよりは軽く便利にて、且つ、割合に暖く、又切れも經濟になりて、子供の服には最も適すればなり、今爰に木綿幅にて表五尺一寸裏三尺のきれをもちて、二三歳の子供に適するものにつき其裁方、縫方のわらましを記す

一、裁切寸法

- 一、後丈一尺六寸
- 一、前丈一尺七寸
- 一、衿丈一尺八寸
- 一、衿幅二寸七分

表裁方

身 前		後 身	衿
			同
身 前			襠 同

一、裁方

- 一、襠幅二寸
- 一、紐丈五寸五分

裏裁方

身 前		後 身
身 前		

- 一、衿肩一寸二分
- (内二分廻ス)
- 一、裏身丈一尺五寸ツツ

(注意) 切れ少き時は、前
身頃の裁落しを襠となし、
衿は別切にするもよし

一、仕立上寸法

- 一、後丈 一尺五寸
- 一、前下り 三分
- 一、脇明 六寸五分
- 一、後幅 イツバイ
- 一、前幅 イツバイ
- 一、後幅 イツバイ
- 一、紐付 肩ヨリ五寸
- 一、衿幅 一寸一分
- 一、縫標付け方

一、身頃 表裏を別々に表を中に縦に二つに折りて、表の上に裏を載せ、後身は出来上りの身丈より三分長く前身は後身より五分長くして表を裏の方に折返して胸はぎの標をなす、(第一圖参照)

次に肩の所に尺を入れ後身を前身の上に肩より折りて、山標、脇明、身幅などの標をなす、(身幅は前後共にイツバイなれば同じ所に八枚一時につけてよし) 次に前下りを脇の方は後身頃よ

り二分下りたる所に幅標と交はる様に横に標を

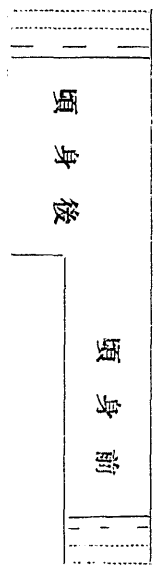
なし、衿付の方はイッパイにして斜に標をなす

(以上第一二圖参照)

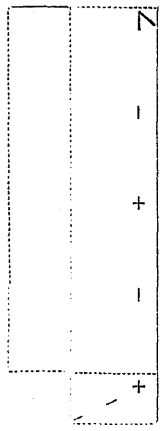
次に後身頃を明け前身頃の紐のつく所に標をな

す

第一圖

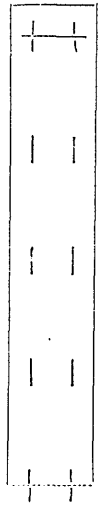


第二圖



一、襟、脇明の標より後身の端の所までは襟の丈なれば其丈に上の縫代凡そ五分を加へたるだ

けに表裏の胸はぎをなし(尤も裏の付かぬものは直ちに丈の標をなしてよし)次に襟の下の幅を前後同じ縫代にして幅をきめ次に上の方は後にて一分五厘上げて標をなし其標より上の幅だけに前の方に標をつけ上と下との間に尺を當て、標をなすこと圖の如し



一、衿 山はぎをなして身頃につく方に心を綴ぢつけ衿幅の二倍に縫代三分を加へたるだけに幅を折り次に身頃につく方を三分の縫代に折り次に衿幅を二つに折りて合標をなす

(注意) 表の地質かたきものなるときは衿心の幅は縫代だけ狭くなし置く方よろし

一、縫方

先づ身頃の胴はぎをなし裏の方に折を返して縫
 袷をかけ次に前下りを縫ひ（前下り表は標の所
 裏は標より一分下を縫ふなり）裏の方に折を返
 しかくし袷をなす次に後身に後襟、前身に前襟
 を入れ身の方に折を返し次に綿を入れるなり綿
 は脇明の處と裾口の所とは少し厚く入るべし
 綿を入れたらば第一に裾を假とぢなし次に脇明
 の所表の方に綿をふくみて大針にとぢ裏の方を
 二分程去りてこまかく紘けるなり次に衿付をと
 ぢて紐をつけ次に衿を裏身頃より衿の方を見て
 紐付より上は衿の方をやゝゆるめに紐付より下
 は同様にして一針ぬきにつけ次に衿先を縫ひ裏
 身頃の方に返して身頃にとぢつけ次に合標を合
 せて少さく紘け後に衿を表の方に返して袷をか
 け置くなり

或母の日記 (第五回)

無名氏

明治三十三年九月三十日生れの女子生後十二ヶ月間の記事
 明治三十四年七月十五日。父が家に歸り來るを凡
 そ壹町先きに於て見付けたり。

七月十七日。某校の創立紀念式に風船を上げたる
 を見物に連れ行きたり。

七月三十日。明日より父は講習のため他行につき
 母は此子をつれ母の實家に連れ行く、茲に滞在す
 る事、四週間にして歸宅す。

八月申より、折々飯を少しつゝ與へたり、此下旬
 より梨子の熟したるものを皮を剥きて與ふ。尤も
 好む所なり、菓子甘さものは左程に好まぬ
 方なり。

九月上旬。例の如く梨子を興へたるに、母の手

に在る大なるものをとらんとせり、此頃より切りに物に倚りて立たんとす。……障子を破る事を面白がる……叱らるゝと泣く事を知るになれり。

生後三百四十五日にして手離しにて立つ。物をかみて與ふれば自分の手にて押し込む。

九月中旬。葡萄豆などやれば、皮を出して食ふ。

九月廿二日。芝居見物に母に連れられてゆき、さまざまの物を食ひ過ぎ下痢を起す。廿五日銀林醫師に診断を受け、散藥六帖を用ひ平服す、輕き腸加答兒なりと云ふ、此頃より氣にさからふ事あるときはウンと怒る、之を強ゆるときは泣く。

九月二十九日。誕生祝をなし、赤飯を製し知るべに配る（餅米九升を用ふ）明三十日が誕生に相當なるを都合により一日繰り上げたるなり。

一ヶ年間生長の大要。

漸く立ち上るのみにて歩行するに至らず。

下齒二枚、上齒一枚あらはれ、少しづつ飯を與へたり。

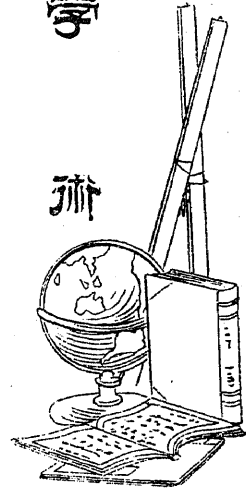
母の手にて守り、別に子守を雇はず、故に家の内にのみ有り勝ちなり、此くの如き事は小兒の爲めにあまり宜しからずと思はる、小兒は小兒の連れともだちを喜ぶもの故、毎日折々外に出で新らしい空氣にもさらされ、又他の小兒と遊ばしむる事大切なりと思ふ。

Zu solchen Kindern gehört eine solche Mutter.

かゝる子供にかゝる母あり。

學

術



動物の生活に是非必要

なもの (承前)

東 海 生

温度壓力及び其他のもの。或生理學者は凡ての動物が生存し得るに必要なものとして適當なる温度と壓力を右の外に加へては多くの動物は非常に高温或は低温のときには死するとは吾人が通常目撃する處の事實である然し此温度の兩極點は動物の種類に依て大に異なる事は勿論であつ

て或動物の如きは其身体は氷結せるも尙生命を保ち得るものがある昆虫其他の多くの小動物は冬の間は氷結して辛くも細き生命をつなぎて來春に至りて又活潑なる生活に立ち返るものもある或人の經驗によれば或る種の魚類は攝氏の零度以下十五度に保ちて結氷せしめ後徐々に温度を高めて溶かしたるに別に害を及ぼすことはなかつたをだ然しこんな時にでも尙死せざるものは勿論珍しいもので随分強き性質を有するものなることは容易に知り得る之より一層甚だしき温度となり攝氏の零點以下二十度となれば魚類は遂に死するに至る然れども又或る蛙は攝氏の零下二十八度にて、ムカテは全じく零下五十度にて又或るカタツムリは全じく零下百二十度にて尙は死せなかつたをだ高温の場合に於ては温泉或は漸々に温めて攝氏

の五十度に於ても尙ほ生活し得る動物がある下等動物中の下等なる單細胞よりなるアメーバは攝氏の三十五度に至るとさ遂に収縮して活潑なる運動を中止するけれども四十度乃至四十五度に至らざれば死なない

次には壓力の事だが吾人が此地球表面にて受けて居る氣壓言いかゆれば大氣の重さは一平方インチに十五ポンドである陸上にある動物は凡て一平方インチに十五ポンドの重量を持つて居るのだが少しも之を感じない之れ全く其境遇になれたからだ又水中にある動物は大氣の重さの外に尙ほ水の重さがある、であるから水中の動物は深くなればなる丈け益々重い物を背負つて居ると一樣である或は大洋に生活する魚類は非常の深い處に住んで居る殆んど二乃至三英里の深さの所に住んで居るの

がある之等の魚類の背負つて居る水の重さといふものは實に大したもので空氣の重さの何百倍といふ位のある、若し斯くの如く深海に慣れて居る魚類が捕えられて海の表面に持ち來さるゝと目の内と外との空氣の濃さが異なつて居るから目は驚くべき程外面にとび出る又皮膚の擴張に依て鱗は片々に離散して脱落する、胃は口から外部に押し出さるゝといふ實にわれなる有様となる殊に烈しきときには魚の身体が全然破裂して碎片となることがある、深海にある之等の魚族は常に強壓の下に慣れて居るのに一旦割合に小なる壓力の處に持ち來さる故内外の壓力が平均を失なつて此の如き結果を來すのである時に深海の魚類が互に争をしたるため兩方とも戦いつゝ海の表面にやつてくる、すると前の様に平均を失なつたがため戦争ど

ころではなく遂に相方と死せざるを得ざるに至る
又或る魚類は陸上に持ち來たされたるため魚の体
内にある浮鰾の破裂や血管の破裂に依て死するこ
とがある之もれやはり内外の壓力の平均を失なつ
たからである

強大なる壓力の場合には右の様だが次は其反對で壓
力が非常に少ない高山や又は輕氣球にて地球表面
にある動物が表面を去ること遠い處にやられると
容易ならざる結果を引き起し人間ならば意識力を
失ひ甚だしきに至ると遂に死することかある之れ
が原因は元より地球表面を去ること遠くなれば空
氣が薄いため酸素も從て不足することもあるなら
ふが其主因ともいふべきものは氣壓のつり合ひを
失なつたが爲めである

西曆一千八百七十五年に佛國パリでやつた有名な

る三人の輕氣球旅行者の話がある彼等三名のもの
は輕氣球に乗り漸次其高さを進めて殆んど二萬四
千尺(殆んど五英里)に達したる頃彼等は遂に全く
自覺力を失なつてしまつたが夫れから段々降つて
二萬尺になつて三名とも漸く再び自覺力を得たそ
をだ、で此三人は再び輕氣球にあるバラスト(舟
などにて荷物少なくて船体餘り浮びすぎて危嶮
なるとき船底に石片の如き重きものを載積す之を
バラストといふ輕氣球にても始めは常にバラスト
を載積するものである)を捨て、又昇りて今度は
二萬五千尺に達した、すると又前の如く三人は自
覺力を失なつたが其後輕氣球は段々降つても唯一
人生を返りたるのみで他の二人は遂に生き返り得
なかつたをだ

斯くの如く此世に生活せる動物は各々或る適當な

る壓力の元に始めて生活することを得るもので夫れ以上の最低度或は最高度に達するときは決して生命を續け得ない

然しながら現在生活せる動物が生活し得る最低最高以外の温度并に壓力中に於ても尙ほ生活し得る動物が今より以前にあつたかも知れず又之れより後に現はるゝかも知れぬと云ふことは吾人は考へられない事はない全く架空の考へではないが現在の世でも過去の世でも亦未來の世でも有機質の食物も酸素も要せずして尙ほ生活を續け得る動物があるといふ事はどをしても思はれぬのであるから此二つは動物に是非とも無くてはならぬものでつまる處一番大切なものである

勿論上述の是非必要なるものゝ外に尙ほ太陽の熱、光、引力及び其他の物理上の適當なる境遇の

元にあらざれば如何なる種類の動物も生活しそらもない然れども今此に話したのは植物に對して特に動物に必要なものを述べたのである熱、光などは必ずしも動物のみに必要であつて植物には必要がないといふのではない一般生物に必要である若し太陽より直接或は間接にエネルギーを取ることなくば動物にわれ植物にわれ決して存在することとはできない

(完)

講義欄は都合により、本號には休載しました。尙次號からは講義欄は學術欄と合併させよう。學術と講義とは、つまり同一ようなものですから。そして本欄を益々多面的に、豊富に、面白くさせよう。



史傳

津崎矩子

(つづき)

下村三四吉

「太平のねむりをさます上喜撰(○蒸)漣船、たつた四杯
 で、夜もねられず」との狂歌は、米艦初度の渡來
 の頃作られしものなるが、これによりても、當時
 の情狀想ひ見るべし。幕府は、米國使節の齎せる
 國書を久里濱にて受取り、その返答を、明年正月
 長崎に於いて與ふべきことを約しぬ。米艦は、來
 春の再來を約して、去れり。然るに、その翌月に
 は、「ロシア」の軍艦亦長崎に來りて、交易の事及
 び樺太島の境界を定むることを請求したり。幕

府は、これに對しても、兩三年の後に返答すべし
 との旨を申し渡して、引きかへらしめき。かゝる
 騒ぎの中に、時の將軍家慶は永眠に就き、子家
 定立ちて、第十三代の將軍となりぬ。

翌くれば、安政元年正月、上下なほ屠蘇酒の醉
 もさめやらぬに、米國の使節「ペルリ」は約を履み
 て、再び浦賀に來り、去年の返答を促しぬ。こゝ
 に於いて、貿易はなほ許さざりしかど、和親の條
 約は結ばれたり。ついで、魯、英、蘭の三國とも
 同様の和約成れり。鎖港、攘夷の論これより漸く
 天下に盛んなり。

この時に當りて、諸侯中、水戸、越前、佐賀、
 土佐及び薩摩等には、各々賢明の君ありしが、殊
 に薩州の島津齊彬は、その識見その力量最も勝れ
 隠然として重望を負へり。幕府の大老阿部正弘も

夙に齊彬の偉人なることを察し、これと相結びて幕政を整理し、以てこの内外多難の際に處せんことを欲したり。これが爲め、齊彬の女を以て將軍の御臺所となさんと議起り、將軍もこれを許されき。乃ち、島津氏の一族島津安藝の娘篤子を養ふて齊彬の子とし、更に之を近衛忠熙公の養女となし。幕府に入興せしめぬ。初め家定は、鷹司輔熙の女を娶りしが、嘉永元年逝去せしかば、更に一條關白の女を娶りしに、これも亦世を早ふし、こゝに至りて、篤子入りて御臺所となりしなり。時に安政三年十二月にして、篤子年十八、後に天璋院と稱せしは、この夫人なり。さて、篤姫の入興につきては、齊彬の臣にして後年明治維新の元勳たる西郷隆盛、命を承けて、専ら周旋の任に當りけるが、内部諸般の細事は、村岡、すべて後見

しまゐらせけり。而して、後に村岡が國事に關して大に隆盛のために盡すところありしは、一は、この事より、互に深く相知るに至りしたためならん。かくて、篤姫の入興は滞りなく濟み、これまでとかくに關係の圓滑を缺きたりし幕府と九州の大雄藩との和合は事實上にあらはれ、上下共に心あるものは、よろこび合へりき。しかも、この際二大問題は、眼前に横はりて、その解決を待てり他なし、一は將軍の養君問題にして、一は、外交問題なり。余は、こゝにこの紛糾せる問題の詳細につきて叙述するの邊なしといへども、後に記すべき村岡の事蹟を知るの豫備として、その大要を語らしめよ。

右の二問題は、一は内事に屬し、他は外事にして、兩者相異なる性質を有すること勿論なれど

當時に在りては、互に關聯せる問題にて、これがため非常に事情の錯雜を生ぜりき。

篤姫入輿の年 七月、米國の總領事「ハルリス」下田に來り、從來の修交和親の外に、通商貿易を請ふの國書を携へ、江戸に入り將軍に謁して之を呈せんことを求めぬ。幕府は天下の物議を憚りてこれを拒みけれど、「ハルリス」固く執りて屈せず遂に翌安政四年十月に及びて「ハルリス」は登城謁見、國書捧呈の事を終りき。幕府も「ハルリス」が演述せし當時世界の大勢に鑑み、且はその切なる要求を否み難く、井上岩瀬の兩全權委員をして「ハルリス」と商議せしめ、數回の談判を重ねて、その十二月二十五日に、通商條約の草案十四箇條を議定し、京都の勅許を得て安政五年三月五日を以て調印すべきことを誓約せり。

この時まさに篤姫入輿の事に盡力されし大老阿部正弘は、既に病歿し（安政四年六月）、堀田正篤その跡を承けたり。正篤は、右の通商條約の草案の勅許を得んために、使者を京都に上せて、その事を請ひ奉りき。然るに、朝議は開港を非として攘夷に決し、一方にては、水戸藩は攘夷論の中心となりて、京都と連絡を通じたれば、幕府の使者は、要領を得ずして、空しく歸りぬ。こゝに於いて、堀田大老は、安政五年二月自ら京都に赴き、諸公卿の間に周旋して、條約勅許の執成を請ひけれど、これもまた不成功に終りき。而して、堀田大老が未だ歸府せざる間に、早くも「ハルリス」に條約の調印を約したる三月五日は來りぬ。大老は四月二十日に歸府したれども、調印をなすこと能はず「ハルリス」の督促は益々迫れり。

時勢かくの如くなりしを以て、將軍の養君問題
は、これと相關係して、頗る重大なる事端を誘き
起せり。養君問題につきては、これを次節以下に
述べんと欲す。

(つゞく)

我をわれとしろしめすかやすめらぎの

玉の御聲のかゝる嬉しさ

晴間なく空に雲そう五月雨に

軒端の梅に實さへこぼるゝ

ひえの山見おるす方ぞ哀なる

いま九重の敷したれば

大君に捧げ奉りしわが命

今こそ捨つる時はきたけり



文苑

はるごめ會連句

ろすゐ

つばき

露を命の

玉つばき

雪のかるなを

さしのべて

からんとすれば

一トしづく

落るは花の

涙かも

すみれ

ゆかしの色よ

濃紫

君が送りし

靈すみれ

手なれの文に はさみては
 夜毎の夢も 露しげし

少女子 小林恒

一、明治の御代の乙女子は たかき光りを仰ぎつゝ
 心も清く身もつよく ありし昔のかたみなる
 母ともなれや正行の 妻ともなれよ忠興の
 二、大和島根の女郎花 露のなさけも天地の
 深き恵にそぼちつゝ 雨にも風にも撓みなく
 八重と一重に芳しく 世界の園に咲きいでよ

梅(竹柏園歌會兼題)

増山み雪子
 大河内國子
 榊山常子

池の上にちりうく梅の花ひらを餌さや見るらん鯉のむれくる
 兒玉千代子
 春なさみ巢こもりしたる鶯もまつ咲く梅にゆめさますらん

松井こも子
 なきわこご去年ばとひこし木下川の老木の梅の今さかりなり
 宮本よりぬ
 北向の梅のしこ枝咲にけりきりのこされてうりのこされて

大竹以勢子
 祖父君のえに植なへし梅林春くる毎に恵をそれもふ
 松浦島子
 ありし世に好みてめてし人ならんおくつきのあたりあまた梅あり

浅井鐵子
 しきみうるみ寺の門のちさき家のみなみの軒にうめの花さく
 堀孝子
 けふあすはまた早けれと師の君に折りてさゝくる軒の梅かえ

堀越科子
 風寒みちりくる花を袖にうけて梅のこかけにうなぬこ遊ふ
 大村八代子
 御社に筆奉り梅たちて手習そめし昔ゆかしき

長谷川柳子
 そゝろにも筆とりて見ん朝かな紅梅にほふひんがしの露
 久保花子
 一つ樹に一つ蒼の梅なからおくれ先たつ宿世ありけり

中村 文子
初午に友と遊びしうふすなの昔の梅は今も咲くらむ

有賀 晴子

はつうまの祭にきばふ森かけの稻荷のみまへ梅咲きにほふ

市田 豊子

月寒く梅が香かゝる畑道を折枝さけてゆく法師かな

木山 銚子

ゆけとく梅さかりなりいつこにも春のいたらぬ里やなからん

長谷部 和子

垣ゆひしあるしばうせて里の子のかさしとなりぬ紅梅の花

四谷 朝子

梅の花うつしうえしより都なる友もよひけり此山里に

池谷 久子

月の瀬の道の行手の里つゝきにほひゆかしく梅が香をする

関屋 愛子

幼児のいたかれなから手をもへて一花つみぬ紅梅のほな

西方 鐵子

玉ほこの道のかたへの梅の花しばし旅人の心れきらふ

金井 繁子

紙のへてうつし見んかな文机のかさしの梅のあまりに清き

田中 千嘉子

賣家の庭せまふして紅梅の主まぢ顔にほころびにけり

原田 信子

汝が友の庭の紅梅花さきぬいさ鷺にあひにとひ來よ

岩本 美玖子

春の日を背中にあひて物ぬへるおうな宿の梅さかりなり

岡田 文子

一村に春の日みちて梅さけりかしこの軒もこの川へも

鈴木 安子

わか宿の一木の梅の花の香に思ひこそやれ月の瀬のやま

羽田 晴子

みざり子の笑み初めたる朝より園生の梅もえみ初めけり

佐々木 雪子

幼子のいたつきまたくいえしより

あけたる窓の梅さきにけり

佐々木 信綱

峰の八峰里の七里咲つゝく

梅の中ゆく谷川の水

或人の結婚の折に 静子

常盤なる松の二葉の若みとり

ふかさちさりは千代もかはらし

別れし友の許に 同

こひしさになえずやあるらん君かおもと
夜毎くしのゆめに見るなり

梅

同

にははすは誰かは知らんしら雪の

なかに咲きたる梅の初花

紀元節のあしたに

さくろ

大御代のすかたなるらん日の丸の

はた立てる門に梅の花さく

紫や聖書にほさむ蜜すみれ

蛙なく壬生のほづれや居士か家

春の野に花かんざしを拾ひけり

出代りや白髪の小使にして

春草や女の子生れし海人か家

春の雪笠の乗と成りにけり

淡雪の空薄墨に暮にけり

草むらに顔を出したる蛙かな

猿澤の池の柳やおぼる月

山門の庇に蜂の巢くひけり

南の小川を限る焼野かな

野を焼て更に茨のとげし
寫眞器を携帯したり春の旅

涼 二 芝 稻 文 湖 鯉 箕 受 菰 龜 遊 移
月 樓 水 村 友 月 村 山 櫻 堂 堂 魚 雪

おっちゃんを海苔についで頂戴な
見送りて別る橋下や春の水
夕風や霞の中の玉津島
文机に土筆を並べ寐入けり
勝鶏の血沙滴る蹴瓜かな
木母寺を漕き出す船や朧月
春風や一陣八百八十寺
奥様は花見がはらの墓参かな
鶯や梅津の里の朝ほらけ
田螺さる繩の帯せし男かな
摘む芹の根よりも白き腕かな

長野盲人學校生徒俳句

春夏秋冬

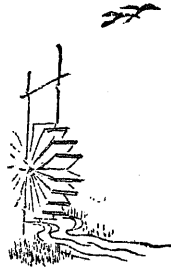
夕暮の鐘の音冴ゆる寒さ哉
足袋穿いて幾度下駄の脱んぞす
重着も軽く感する寒さ哉
軒垂れの音もやみたる寒さ哉
まだくさ探り楽しむ梅の花
一本の杖を力や菊の花
鶯に春の誠を覚えけり
あなたたま此所へお出でよ梅香る

飯島八千溪

閑 玉 鬼 さ 禾 緑 松 郊 聽 圓 弦
菴 浦 水 ぼ 勳 坡 軒 外 瀧 係 月

祖 山 井 同 同 同 同 同 同
みつえ女 まさ女

足袋穿いて彼岸参りの初御堂
埋火の消えたる夜半の寒さ哉
手すれたる點字の板や身にしみる
かけそこねく足のこぼせかな
點字やめて手をあぶりたる火鉢哉
ながし來て火を廻り立てる炬燵哉
梅の花ごんな色して香るやら
五人して炬燵争ふ一間かな



大島 傳田 嘉平 喜作 近藤 小比 伊比 女

女子の貞操を責むるに急なる日本は、遂に男子の貞操を忘れたるが如し。男子に對する貞操は、女子唯一の婦徳として、授けらる。而も女子に對する唯一の男徳を男子に授けざるは何ぞや。妻となりての義務は、女學校脩身の唯一の課程なり、併も男子の學校に於て夫としての義務を授くるを聞かず。吾は、男女道徳の標準此の如く、均衡を得ざるものあるを見ず。

男子の貞操

説林



婦人の修養

云ふ勿れ婦人は見識狭しと、云ふ勿れ婦人は知識淺薄なりと。修養の機會を與へずして、此の如く云ふは、誠に云ふもの、誤なり、妙齡二八即出で、人の家に行く、妻の讀書を喜ばざる夫あり、妻の交際を好まざる夫あり、而して少き妻は、一切を抛ちて、夫の給仕に侍せざるべからず、庖厨を司とらざるべからず、裁縫を自らせざるべからず、會計出納の任を負はざるべからず、子を育せざるべからず、而して最も困難なる舅姑の機嫌を取るを勉めざるべからず、日夕此の如く忙殺せられて、遂に自己修養の機會を與へられず、女學校時代の智識は漸く印象を薄らぐると同時に、讀書の興味も亦厭伏せらる、修養せしめずして、而して敢て婦人の知見乏しさを誹る。誠に誹る者

の罪にわらずとせんや。婦人に修養の機會を與へよ、これ實に婦人の地位を進め依つて又社會の發達を大にする所以なり、

保育法改良の第一看手

幼稚園に於て、幼児に文字を教へて得々たる保姆あり、これ明に幼稚園の主旨に反する所、幼児將來の發達を阻害すること大なり。目前の成績に誇らんが爲めに、複雑極りなき困難の手法を課し、併も幼兒をして爲さしめず、保姆自ら之を仕上げた土産と稱して持ち歸らしむる者あり。爲さんと欲する幼兒の活動力を阻害し、工夫想像の力を働かしめず、遂には、自ら働かずして、一も二も他人に依頼する傾向を助成せしむるものなり。擧げ來れば此の如きもの頗る多からん。幼稚園保育

法に改良すべきもの少からず。併も此の如き弊風の改良は宜しく先づ其第一着手たらざるべからず。

教育家の理想

前田長太

美術家に取りて其最も大切なのは理想である、理想なき美術家の作品、若くは理想低き美術家の作品は實に見るに足らざるものである、一幅の畫宛として聲あるが如く、一魂の石宛然生命あるに似たるは、美術家が其脳裡の高崇なる理想を顯表するが爲に苦心經營せる結果なる事は人の普く稔知する所である。

教育家も亦是れ一種の美術家である、否教育は術中の術と云へば、教育家は美術家の最も大なる

者と言つて宜しい、其の托せられある兒童は、取りも直さず是れ其の理想を顯表する有聲の畫、有生命の石である、其の技量を發揮する作品と言つても差支ない、勿論貴重なる作品と言はなければならぬ、有心の人間、萬物の靈長であるから……然し既に惡癖邪習のあるときには、教育家の最も苦心經營を要する所である故、中々困難なる作品と云はなければならぬ、之に理想を吹込んで、眞個萬物の靈長たるに耻ぢぬ人物とするは、正しく是れ教育家の技量の存する所である。

去れば教育家に取りて必須缺く可からざるものも、亦是れ理想である、始終理想を脳裡に浮べ、理想を眼前に立て、如何にせば此の理想を兒童の上に實行し得べきやと云ふ事は、其の一生の天職である、理想なき教育家、若くは理想賤き教育家

は寧ろ其の寄托せられたる兒童を蠱毒する者である故、世の父兄たる者は最も茲に注意着眼しなければならぬ。

然らば則ち教育家の理想とすべき所は何であるか？俸給を受け、バンの爲に働か、顯要の位置に立たんと欲し、老後の備を爲さんと欲す、是れ其の理想であらうか、否、斷じて否、勿論此は罪すべき事ではない、人生衣食なき能はず、兒孫あれば之が計を爲さるべからず、然し之のみを目的とし、之れ以外に一念の高崇なる道義天職に想到するなくんば、吾は之を利己的教育家、衣食住の爲に働ける教員と絶叫するに憚らない、教育家の天職や貴し、此の如き者は教育の罪人と謂つても、敢て矯激の言ではない。

教育家は人間を預つて居る、否切言せば、未來

の國民を預つて居る者である、故に國家の教育家に期待する所大なるが如く、教育家の國家に對する責務も亦甚だ重い、國家は教育家に心身健康、識徳兼脩の人物の提供を要求して居る、忠良の民愛國の士、亦皆之を教育家に期待して居る、是故に教育家の理想とすべき所は、己れ一身の計ではなく、國家百年の計である事は如上の言によりて自ら打算せらるゝ所である。

若夫れ此の理想を實行するに當りては、教育家たる者其の學校に入る毎に『我は國民の準備者である、我は人物の養成者である、忠良の民を作り愛國の士を供す、一に我が双肩に懸つて居る』と云ふ言を以て自語自警しなければならぬ、去すれば兒童の体育、知育、徳育を行ふ際に生起する百の困苦艱難は容易く恐ばれ、事業の單調なるも、

俸給の微薄なるも、兒童の忘恩なるも、毫も心を亂し、志を動すに足らず、我は唯だ天職を竭せば足る、國家に報ふれば足る、義務を遂行したる時の愉快即是れ我が報酬であると云ふやうなる此の如き者を稱して眞正の教育家とは謂ふなり。

嗚呼世の教育家よ、須らく自重せよ、彼の畫工石工は巧と雖、紙と石の上に働く者のみ、卿等は人靈の上に働く者なり、父や母や尊しと雖、唯其の一家族を養成する者のみ、卿等は一國民を教育する者なり、ヨリ大なる、ヨリ功勞多き天職何くにか在る。

(完結)

松本文學博士の「ニューイングランドの一家庭」は續載すべかりし筈の處、完結までには殆んど尙七八回を要し、且つ本回よりは談、博士の寄留さられし一人の家庭に及ぶ事なればさて一先づ、前回にて完結せし、讀者之を諒せよ、



寄書

大に女子の反省を求む

香川縣 大西永太郎

我國女子教育のことは既に十數年以前より大に有識者の間に唱道せられつつあつたが、今や女子も男子と同様に智徳並行の必要ありとて、歐米各國の制を參酌し何れの縣でも高等女學校の設立のない處がない、其上女子職業的の學校も續々設立を見るのみならず、女子大學まで説けられたのは實に社會一般が女子教育の必要を實際に感じて來た結果に外ならぬのであるから、誠に我國女子のため否我國文明のため慶すべきことである。思ふ

に今後の女子は其智識と徳操の點に於て、必ず文明社會の賢母良妻たるに恥ぢずして理想的の「ホーム」をも形成せらるることであるから、自然我國女子の地位が高まつて來るであらうが、未だ文明の過渡時代である故か、事多く目的と並行せず學問の點に於ては稍觀るべきに至りしも其徳操の點に於ては却て如何はしと疑ふべき點もないではない、今後充分戒心せば女子と小人は養ひ難しと云ふ諺も社會の外に放逐せらるゝであらうと思へば喜ばしい次第であるが、ども女子には從來歴史的に種々の缺點を有して居るから、教育の勢力で以て其缺點を根本的に打破せねばならぬ、予は其缺點を婦女全般が有するものなりとは云はざれども、眞主たるものを指摘して左に之を述べようと思ふ。

アサハカナルコ——男子と雖も喜怒は概して其形容に現はるる者であるが、殊に女子は感情強き性なる故か、僅かの不平でも直に其形容に現はして彼の舉動をなすは彼の事が氣に入らざりしからであるかと人をして直に其原因を推知し得しむ、故に女子には與みし易いなどと自然輕侮の念を起さしむるのである。

志操不確實なる事——一身の處理を慮ることも必用であるが婚嫁の後は夫に依頼服従すべきもののみ考へて依頼心盛なるが故、志操不確實である例へば教員の職などにあつても其職務に誠實ならざる傾がある。

淡泊ならざる事——言ふべきことを確然と言はず陰に多々不平を泄し或は言ふべきことを沈黙するは女子の守るべき本分なりと誤解し居るから、人

をして女子と小人は養ひ難しなと云はしむるのである。

女子同士相妬むの風ある事——職務上に於ても男子と對峙して事をなさんなどの念慮なく、勇氣なく女子同志陰に反目嫉視し、互に缺點の指摘をなさんとする傾がある。

研究心に乏しきこと——同一の學力を有する男子と同境週にありても、と一も研究心に乏しいから最後の勝利は男子の有となるのである。

自棄心を起すこと——或る場合に刺撃を受けなどする時は一時度に起るたる奮勵心を起しても其は唯一時的に止まり遂に逆もいかんと斷念し自棄する傾がある。

活潑敢爲の念なきこと——我國の女子は唯温和柔順といふことを主として居るから、温和は優柔と

なり、從順は卑屈となり、優美は懦弱と變じ活潑敢爲は優美温和を失ふものと誤解して居るが女子の本分を盡くさんには活潑敢爲でなければならぬにも係らず、大に此の念の缺乏を認むるのである。

以上は唯通有せる缺點と認めたる諸項を擧げたのみであるが、是等は決して鎖細のことではない、女子は是非とも一家の整理、子女教養の任に當らざるべからざるものであるから、社會の改善を計るも、先づ家庭の根底より改善することが最有利であるのと同じく、直接子女教養の任を帯ぶる女子の缺點とも見做すことを打破するの近道なるを信するのである。實に母の能否は直接に世間に現はれ來る者よりも其子女が之を紹介するものである、即ち子女の耳に入り目に入り心に入る其

感化の大部分は母より受くるものなれば、母たるものの卑劣なる根性、懦弱なる氣質は何時の間にやら默示に従て其子女の心に染み來るものであるから女とし云へば斯かる缺點の存するものなりと認めらるゝことのなき様、其品性を高め社會の望みに添はんこと切に期する處である。

婦人の心得

三河境川源 近藤とき子

幼な兒の父母の膝下に在りて物いふ事を習ひ初むるに當りて犬猫の啼聲雀鴉の啼聲など父母の言はるゝまゝを真似ていつしか犬は「ワン、ワン」猫は「ニヤア、ニヤア」「啼き雀は「チュウ、チュウ」鴉は「カア、カア」と啼くよしを悟るなり、是等の單一

なる發音をはじめとしてよろづの事物の名稱を次第々々に覺ゆるは幼兒の自から發明せるにあらざして必ず父母より授づかりたるなり、中にも母は家に在り整理を行ふ下に子の教育を爲すものなれば、其の母たるものは身を慎しみ相應の學力を脩め子の善き様家庭に教育を施すべし、まして第二の母たる女子は男子に歩を譲らざるの精神を具し教育を受けざるべからず、聊か記して注意を惹く爾。

幼者の教導につきて

東京 和田 藏子

幼なき者は、後々には、國家を組織するの任に當るもので、其の身體の健かなるも弱きも、性質

の善きも悪しきも、皆國家の消長に關するものでありませうから、之を教導するには、最も綿密の注意を要しなければなりません。

すべて、幼なき者は、父には憚り近ずかすして、母にのみ親しみよるものでありますから、母の教の肝要なる事勿論であります、すなはち、善惡ともに、大かた、母にうつるもの故、母若しくは母に代りて世話する者の徳義正しくして、之を見習ひ、おのづから、惡におち入らず、善におもひくやうに、教導するのであります。

さるを、姑息の愛に溺れて、我儘の心を増長させ、飽食暖衣して、身體を損するやうな事あれば却て、にくむと同じことでありませう。

右の方法の一として、常に考へて居ります事は先づ幼者に勸むる事も、禁ずる事も、自から實行

する事。

次は、幼者に對し、顔色言語につき最も、しむべき事にて、これらは、みな、幼者の心中に印象をうつすものであります。

次は、幼者が、あやまちをなしたる時は、沈着て戒むる事にて、些細のあやまちを戒むるにも、妄に鞭ち、又は脅迫して、倉庫暗室などに入れるやうな取扱ひをする事あれば、いづれも、心身萎縮の基となるものであります、又暖縮なる事をいふ時は、唯其の威を損するのみならず、遂には其の教に頓着しないやうになります。

幼なき時、まさたる種子の、善惡と多少とは、實に人生の終身に關するものであります。

此任にわたるものは、最も心を用ふべき事ではありませぬか。

政さんの感念界

長野 飯島八千溪

政さんわ、今月で、丁度二年七ヶ月であります
私の所へわ、折りく遊びに来ますが、中々お辭儀もよく出来、色々の事を、よく知つて居ます。

今日も、私の所へ遊びに来て、三十分間計り、私と、お話をして歸りました。今其、お話しした事を、皆さんに、御紹介致しますよー。

身体部分名稱 (假名わ、政さんのお答)

- 目 め。鼻 はな。口 くち。
- 歯 は。耳 みみ。眉 まゆ。け。
- 頭 あたま。髪 かみ。腹 はら。ほつぽ。
- 臍 へちよ。手 て。指 ゆび。
- 爪 ちめ。足 あし。膝 ひざ。おちや。

尻 しり。

右の中、膝、を「おちや」と云ひましたのわ、如何にも變だと思ひましたから、政さんの、おつ母さんに就いて聞きましたら、坐つた時、膝が出ると、夫れ「ちや」が出た(斯る時に用)と云ひましたから「だろー」と云われ、ましたら、實に、子供に云ふ言葉わ、よく注意せねばなりません。

衣服及び頭道具の名稱

- 着物 衣べー。美服 わかいべー。
- 帯 おび。前掛 まいか。
- 紐 ひぼ。襷 たすき。
- 袂 たんぼ。筒袖 おつぽ。
- 絆纏 はんでん。手拭 てんて。
- 櫛 くし。簪 かんざし。かんか。

家具其他の名稱

茶腕ちあひね ちやーちや。 急須きゅうす ちやく。

鉄瓶てつびん およ。 時計とけい とけ。

隣寸まぢち まち。 布團ふだん れふとん。

新聞しんぶん しんぶん。 足袋たび たび。

糸いと いと。 綿わた わた。

針はり はり。 鉛筆えんぴつ ペット。

烟草たばこ ばつば。 鋏はさみ はさみ。

繪畫の說明えいさのせつめい

自轉車じてんしゃ くるま。 きしゃ。

オールドコインたばこ 猫の繪ねこえ。 さる。

傘の繪かさえ。 こま。(開きたる様子ひらきたるようすが似)

胃活の繪いかつ。 ばこちゃん、かちゃんかちゃんのちゝのんで、

手にて形容けいようをなす。

金丸商店かままるしょうてんの銃孔圖つうこうずの鳥とり とゝゐる。

蜂印葡萄酒はちじるしぶどうしゆの瓶の繪びんえ。 おちやけ。

其他その他、中將湯ちゆうじやうとうの繪えに就つき、身体部分しんたいぶぶんの名稱ななを指

させましたさせましたが、皆みな、當りあたりました、只ただ、眉まゆだけわ、

指させませんでした。

自他の區別じた他のくべつ

之これは誰たれの手て。 まさちやんのて。

之これは誰たれの手て。 とちやんのて。
(政まさの時私じりをまつさんと家内けい内のものが教おしへしと有あればなり)

とちやんわ。政まさちゃんのとちやんわ、おうち。

之これは誰たれのとちやん。むこーのねちやんのとちやん

之これは誰たれの金着きんちやく。政まさちゃんの。イヤとちやんのだろ

ー、ウー政まさちゃんのだ。

對話かたじ

おぼゝさんわ。何なにをして居いるの。べたいって、こ

たにあたッて。(後あとに聞きけは火燵ひだりにあたり居いりしこの事こと)

とーさんわ。ねんねして

かーさんわ。まんまたいて、おちゝのんで。

ねーさんわ。おべーこせて。

名譽心

政さんわ、りこーか、ばか。まーちゃんじこ。

ばかだろー。ウーじこだ。

イヤばかだ。まーちゃんじこだくと。不快な顔
をしましたから、そこで、ホンニ政さんわ、お
こーだ、と云ッたら喜んで、にこ〜しましたから
御褒美にお柿をやりましたら、ごっちょアンとお
辭儀をしました。政さんわ、誠に、りこーで、可
愛らしい娘さんです。

數の感念

其次に、お勘定を、して見ましたが、夫れわ、未
だ、だめでした。政さんのお年わ、と云へば、指
を、三本出すが、其他は、一切いけません。

色

色わ、赤と白とを知ッて居ましたのみです。
これから、政さんを、研究して、皆さんに、御紹
介致しましよー。

植物と子供といふを讀みて

中澤よし子

私は從來此婦人と子供を愛讀して居りますが、
前號に出て居りました「植物と子供」といふのを
讀みまして實に感じました。私は只今、現に或地
方の幼稚園に奉職して居りますが、其幼稚園は田
舎のこととて建築は至て不完全でありますから、
幼児が活潑に楽しく遊ぼうとするには、是非とも
遊園に由らなければなりません。そうして其遊園
はと申しますと、僅な狭い土地を、しかも他の學
校と共同につかふので、幸に砂は多くあります

少し掘ると直に大石瓦礫が出るといふ有様です。ですから幼児は外に出ましても、どうも遊び方がない様子です。そこで私は考へまして、どうか植物を養ふことをはじめて、遊ぶ方にも、徳性の方にも、身体の方にも、利益があるやうにしたいと勉めました。まづ庭の砂をかきあつめて、私が卒先して山をこしらへ、池を堀り、石を積み重ね、寒氣の時とて多くはない草を集めて植ゑたりしましたところが、始には幼児等は、何をするのか、といふ様な風で只ながめて居りましたが、遂には一人二人三人五人と、彼處此處に同じやうなことを模倣しはじめましたそれで私は、或保母があつめた種々の草を、或日會集の時に、全園幼児に見せまして、其美妙な点を十分はめたゝえ、説き聞かせました處が、皆々大に興味をもちまして、直

に植ゑつけんことを望み、中には「早く植ゑんと枯れしまふとわかんに」など言ふ兒ができました。只今では、幼児等が自分たちで作つた山池の外に一の畑もできまして、水仙、葉蘭などいろ／＼植ゑつけ「今に種蒔く時分にやな／＼わつしうちから朝顔の種持つてこんに」わつしや／＼菜種を持つてこんに」など言ふものが續々できまして、一日も早く暖氣にならんことを望んで居るやうになりました。

右のやうなことを、現在經驗して居りますうちに、幻稚園では殊に大切に常に種を蒔いたり云々の御説を讀みまして、一層深く感じましたものですからつまらぬことをばつひ長々と述べ立てました。



三月の天地

かま生

春の曙。東天紅と告げ渡る鶏の聲に呼起されて、
 耳をばだつれば、早や烏栖を出でし鳥の聲、檐端
 に踊る雀の足音など、殊更に春めきてゆかしく、
 空高く快晴を報ずる雲雀の清く朗らかに、さては
 山際近く枯尾花踏み分けて友誘ふ雉の強く澄みわ
 たりたる聲などの聞ゆる、又一入の趣あり。

遠山近郊總て一帯となり、神韻漂渺の中、幽かに
 森あり、林あり、堂塔殿閣亦斷續隱見す。此端

總ての聲、總ての形、總ての色を、盡くうす紫に
 あるは淡紅く包み渡して懸けるは、名に負ふ春霞
 なり、外山の霞、夢野の霞、霞か雲か將た雪か、
 霞に消ゆる雁の聲、何れ面白からざるものやわ
 る。

虹、漸く現れ、燦爛たる七色、大空を彩つて、
 次第に朦朧として脚下に消ゆ、何等の壯觀ぞや
 げに靄黓は、春の空の本色、清澄は、秋の天の
 特徴、秋の光は、義を表し、春の光は、仁を示す、
 故に曰く、

春風一たび吹ひて萬物自から生ず、と。見よく
 長夜の眠より醒めてやうく泥押し分けて顔さし
 出し、まばゆげに細目に開きて、川上の井堰の蛙
 の沮洳たる雜草の片蔭に、カラ〜と笑ふあり。

稻株高さ沼田の面には、田螺のイザリ始めし文字

も見え細流川の砂黒き邊には、蜆の頭もほの見えつ、蚪の背もゆるぎて現れつ。

波穩かに、白帆の寛く通へる春の濱邊には、蜩、蛤など競いて拾ふ童あり、網に上りし白魚の賑かさに蛭子顔せる漁夫もあらむ。

梓弓おして春雨長閑に降り來る。晨に、彼が暖く草木の上に露へるを見ては、誰か彼の鴻徳をたへざるものぞ、彼果して志士仁人の心ある乎。

更に深夜に、彼が閨の板戸にそぼてる點々を聴かば、何人か其幽懷を動かされざるものぞ、彼春雨、抑亦騷人墨客の懷ありて然る乎。

我草庵に、蓬は盛に延びぬ。我後園に、山椒の若芽高く香りぬ。行手の傍の芝生に、土筆の立つもの高低二三本。山の横面はる風に、握拳の早蕨や三五本。ムットして歸りて門の若柳に、は、

笑まされては慚愧の至

種蒔には、煙草、夏葱など、中旬よりは、隠元豆、蒞蓀菜、茼蒿、夏大根、夕顔、胡麻、茄子、南天、紫蘇などあり。

植替には、榊海棠、柳に櫻、柘榴撫子橘など、大抵の植物可ならざるものなく。

接木には、梅、桃、杏、枇杷など、根分には、胡蝶花、燕子花、鐵扇、寒菊など、之亦大抵可なり。

春分。月の廿一日頃、太陽は赤道上に直射して我に在りては、晝夜平分の季となり、鴻雁既に遠く北に去つて、輕快なる燕は、勢よく黒潮を越えて翔り來る。

雀に雲雀、金雀、金絲雀や、山雀、小雀、四十雀、駒鳥に鶯、頬白に鵲、白など、一切の鳴禽類は、舉

げて嬉しく陽春三月を歌ふ、宮徴の調、春の林に於て殊に妙なり。

春山笑うて言はず。木蘭は葉に先ちて紫濃く、玉蘭は其名の如く色鮮かに瓣大さやかに、辛夷は稍小形に、木瓜は紅深みて、各待兼顔に咲競ひ、堇菜あり、蒲英菜あり、稀に開くもの早や兩三、尾の上の彼岸櫻は逸早く綻びんとす。

玩弄具及遊技の話 (承前)

關 根 正 直

(九)ぶらんこ とは誠に妙な名で、是れは西洋傳來の遊技とのみ誰れも思つて居りますが、實は千年餘り以前に我が國に行はれたもので、昔はユサハリといひました。ユスブリの意味で、漢字には鞞鞞とかく。支那では漢武帝の時後庭の遊戯だと

いひます。我が國でもそれを摸したので、既に嵯峨天皇の御作の、鞞鞞篇といふ詩などがありますから、實に古い事が分ります。尤も此の古風は中絶して、近年より西洋の遊技をとつたのでありましやう。

(十)子をとりく すべて鬼を出す遊技は佛教家の説より出たもので 地獄の鬼が来て、子供を捕へんとするを逃げる意味である。此の「子をとりく」といふ遊技なども、三國傳記といふ書に惠心僧都がある經文を見て、其の心をとつて始めた業で、例の獄卒が子を捕らんとするを、地藏菩薩が前に居て、子供を保護して捕らせまいとするに象どつたのだとあります。もし惠心僧都の時代からあつたとすれば、千年近くの昔から行はれた古い遊技です。

(十二) 隠れんぼめかくし 嬉遊笑覽に、宇津保
 榮花物語などに隠れ遊びとあるのは、今のかくれ
 んぼの事だとあり。又今は「目かくし」と「かく
 れんぼ」と二種なれど、もとは同じ戯れだともい
 つて居ます。又目かくしは、昔めんないちどりと
 云うたともいつて、其の詞に「めなしどち」聲
 について「ませませ」と囃した事をもかいてありま
 すが、かういふ囃し詞も、昔のは幾らか上品に聞
 えます。

(十二) かけくら 昔は走りくらべといひ後に訛り
 て走りくらともいつた。今より三百年程前の狂
 歌集(古今夷曲集)に「帆をかけてひいふう三つ
 の浦風は走りくらや足早き舟」といふ歌が
 あります。「ひいふう三つの」といふので、「一い
 三のかけ聲で走り出した事も知られます。

(十三) つばな 〳 〵 これは今小兒達が口には囃し
 てゐるを聞きますが、遊技はせぬやうであります。
 近世まで行はれた仕方は、嬉遊笑覽にかいてあり
 ます。

つばなぬこゝ鬼ごとの一種に鬼になりたるを
 山のおこんと名付けさをひつれて下にかいみ共
 々「つばなぬこゝ」といひつゝ、抜くまねびを
 して終に鬼にむかひ人さし指と大指にて輪を作
 り其の内より覗き見是れ何と問へば答へては
 うしの玉といふと皆逃げ走るを鬼追かけて捕ふ
 るなり

とあります信實朝臣百首に「いとほしやまだかぶ
 ろなるうなるども焼野にあまたつばな抜くなり」
 といふ歌があります是れも子供の遊技を思ひ寄せ
 てよんだものと見えますから鎌倉時代から既にあ

つた事と見えす

(十四) 芋むしころく 是れも離し詞ばかりで遊

技は廢れたやうですが、例の嬉遊笑覽にはかいて
あります

帯にとりつきとりつきしてかゝみ居てゐるく其
のはやし言に「芋虫ころく」瓢箪ぼつくりこ

といひつゝ暫くあるきて先に立たる者「わたの
くせん次郎」と呼べば最後に居たる者離れ出

て前に来て「何用でござる」といふ呼たる者「手
前今迄何して居た」答「柵から落ちたばた餅を

食て居た」それならば雨がふるか鎗がふるか見
てこ」といへば見にゆくまねをして雨がふる鎗

がふると問ふまゝに背かず答ふ其の時前がよい
か後がよいかといへば前がよいといふ「それな

らば前にゐよとてそれを先の第一番に居らしむ

さて始の如くはやし歩むなり

とあります。是れも前と同じく今は「芋虫ころ

く」といふ離し詞ばかりが残つて遊戯はせぬや

うでありますがいかにございますか

なは此の外にもいろくくの玩具や遊戯の事は古書

に見えてをりますが目今絶えたものは略して申し

ませぬ現在残つて居るもの又幾らか變化して傳は

つてをる事の何時ごろからあつたかといふをあら

くお話するつもりがつひく長くなりまして誠
に御體窟

(完)

雜 祭 の 話

せ く 生

(一) 雛遊びのこと

雛遊として兒女が戯に人形の御客事などする事は

實に其の本能より出でたる自然の遊戯ともいふべ
く、古より上下一般に行はれたる風習なりき。然
れば朱雀村上の御代頃(今より凡九
百七十年前)よりの物語類に

は(榮花物語第十四あさみぢりの巻に、寛仁二年の春御堂關白道
長公の御子中將長家卿、御年十五ばかりにて、御形いとうつ
くしく、よき御智のほどにおはするに、侍從中納言行成卿の姫君、
御年十二ばかりなるを幸らばやと、さるへきたよりして、御堂殿
の御けしきかうかひひ申し給へれば御堂の御詞に、)この事多
く見ゆ。中世の末より近世の始にかけて、三月三

日の雛祭一般に行はるゝに至りても、平生之を
玩ぶを(伊勢山田邊にては
小米糰といへる五
六分許の紙雛を作り、其の衣服を岐宜といひ、丹青もて文を色ど
り、尙紅絹の切なごそへて、夫婦奴婢なんご揃へ、之を客間居間
臺所などある家やばり紙つくりにて据ゑて、人家平日の睦しき様
なまれば常の遊びさせし事、今より百八十
年許前なる享保頃までは行はれたりといふ。)諸地方の遊び
様まち／＼なりき。今尚子守などせる田家の兒女

が「ひひな草」もて雛遊するは至る所に見るを得
べし。(伊勢桑名邊にては、重九の節句即九月九日を「かつらこ
(葵葛子)の節供さいひひひな草を(かつら草)とい

ふ。葵葛子を作る
に用ゐるが故なり)

(二) 上巳の祓のこど。附
雛遊との關係。

三月上巳(第一の日のひ
己の日のひ)の日、水邊に祓する事は早く支
那より傳りき。後巳の日には關らずして其の三日
に決せり。其の式の一は天兒(共に一種の)を陰

陽師より受け、之を贖物又は撫物といひて、一切
の我が災禍は之に負はせて流水に捨つるなり。加
茂保憲(おぼえのむすめのみ)女集に「おぼぬさにかきなでながら天兒
は幾十の人の淵をみるらむ」又源氏物語須磨の卷
に源氏須磨へ左遷の時、三月朔日巳の日にて浦邊
に出で、陰陽師をめして祓せさせ給ひ、舟にこと
／＼しき人形をのせて流させ給ふ云々。の類多く
見ゆ。

江家次第(大江匡房
の著書)の立太子の條に、太子陪膳の

事を記して曰ふ。「宮稚き時女房を陪膳とし、女藏人之に傳く。藏人の一人、器二口を御盤に居ゑて持參す。即て御三把を受け帳中の天兒に奉ぐ云々、但常の天兒の土器を撤するとありて後、比々奈に供す」とあり。日次記事に「上巳雛遊本是贖物之義而所謂這兒則解除之撫物也」。國朝佳節錄に「三月三日兒女制三紙人一爲翫者物之義乃祝具也」などある如く、中世の未三月三日を雛祭の期と定めしは(臆説二三)この上巳の祝の遺意に雛遊を加へたるにて今尙雛祭と稱するにても然思はるゝなり

三) 三月三日雛祭の起れる始。

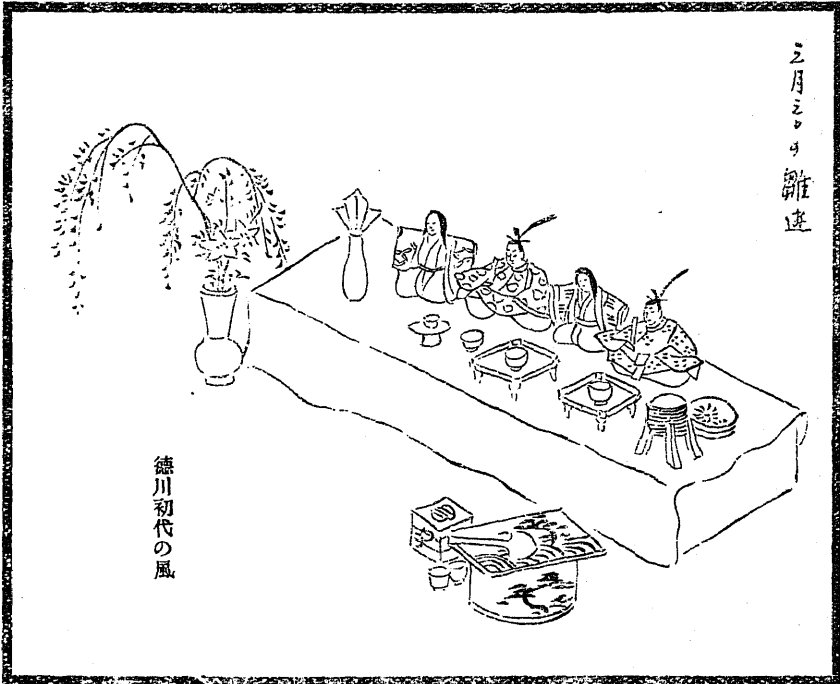
飛鳥井榮雅(御土御門天皇頃の人今)の三月三日雛祭の歌に「都にはやよいの空ののどけて雛の遊も思ひやるかな」とあれとも、當時の年中行事を記載せる書物の中に、三月三日の條に雛の事を記せ

るもの一もあらざるを見れば、榮雅は會雛を思出せしか、或家にて雛遊せるを見て咏ぜしに止まり決して未だ世間の風にてはなし。漸く下りて天正九年頃(今より凡三)の書(無名)に初めて「雛は人形なり」とありても其の時を書かず。尙下りて徳川家綱の寛文三年に印行せる書(増山)に臆氣にも其の三月三日の條に「雛遊こそ慥な期もあらねば打まかせては雛なるべし云々但聊餐應あらば此頃の俗にまかせて今日の事にも成ぬべし」とあれば此れ等を合せ考へて、先天正以後徳川の初代(年間り)までに定りしものと見て可なり。

四) 雛の調度

雛の調度はその製につれて品に上下ありき。紫式部日記上卷に上東門院皇子を産み給ひし事をいへる條に「稚宮の御まかなひは中納言の君ひんが

しにまゐりすへたり
 き御臺御皿ども御著
 の臺洲濱なども難遊
 の具と見ゆ云々」(之
 御誕生の稚宮に据え奉る
 調度をいひなるなれども
 當時難の調度の様)。斯く
 を證明して餘あり)。斯く
 も宮中の貴き邊の御
 遊は美しかりし様な
 れど、民間の賤しき
 際にては、相應に質
 樸簡易のものなりし
 事後世の小米雛姫瓜
 姫髪葛子の遊を以て
 も推知し得べし。徳
 川家重の寶曆の頃



三月三日 雛遊

徳川初代の風

（今より百五）の著書には「
 千年許前）の著書には「
 近年は雛配膳の調度など
 殊の外美を盡し金銀を鏤
 めなどするとはなり
 ぬ。然れども貧賤の家に
 は蛤の貝殻に飲食を盛り
 て供するも亦多し」(都光
 など記せる類多し。
 貝殻を雛の調度に用ゐ
 て主に其の飲食器となせ
 るは濱邊の遺風の波及に
 も因るべけれど、又其の
 品の愛すべく且面白味あ
 りて、昔よりは是のみにて
 貝合などの遊わりし程な

れば、如何にも雛の調度として似つかはしきより終に一般に之を賞用するに至りたるならむ。

五) 雛の供物。

雛の供物は地方により又貴賤によりて一様ならざれども、其の主なるは草餅と白酒となり。

白酒 支那には桃花節(三月)あり。この日桃花

を採りて酒に浸し飲めば必病を除き顔色を増すと稱し、名けて桃花酒といへり。(桃に就いては支那に

壽に因みあり。唐の徳宗之の日を桃花節と定め祝日とす。曲水宴と共に夙に我が國に傳はれり)此の儀我れ

に移りては終に此の雛祭と同日となるより、酒は亦雛に供へられぬ。其の桃酒の何故に白きかを考

ふるに、母子の健全をといふ思想より聯ねて乳汁に擬せしに非ずやといふ人あれども、是亦彼の貝

殻の濱邊の遺風なるが如く、昔の酒は一般に白酒なりしが後世にまで傳へられたるならむ。

草餅 文徳實錄を見るに古は三月三日母子草を蒸擣きて餠を作り之を食ひて母子の全きを期した

るの風ありき。當時恰もこの日は上巳たるを以て母子(即ち遺子)といへる紙人即雛にて水邊に祓す

る事行はれたるより、母子餠はいつしか遂に其の雛に供へられぬ。爾後祓の事すたりても草餅を供

ふる雛遊は益々行はれて、母子草も遂に移りて蓬とはなりぬ。是れ其の様のよく似たるのみならず

餅となすに寧勝ればなり。其の何故に菱形とするかは明ならず。考ふべし。

六) 雛の種類。

雛には地方的の面白きに吉野雛會津雛琉球雛等あり。古代には絲卷雛、紙びな、次郎左衛門雛等

あれども、現今一般に行はるゝは親王形若しくは内裏雛或は札頭(紙幣)といへる神功皇后武内宿

襦などなり。東京にて專雛を商ふは日本橋區十軒店にして(多く古代雛を藏するは本所區石原町の戸崎萬次郎氏 神田區旅籠町の清水清風氏などは有名なものなれば好古者流ば宜しく就きて一覽を乞ひ給へ)凡て古は大形の物流行せしが、今は只田舎の大盡びきとなりて、漸次小形となりぬ。衣裳は錦金襴の類を用ひ、顔は木彫象牙彫を用ひて小道具までも金銀珠玉の贅澤を極むるに至れり。(去る三十年の事なりしを、佐野常氏伯の令嬢は有馬家へ嫁し折に持参せし雛人形一切の道具に今の禁裏の有様を寫して、舞樂殿まで備はり、伶人倭舞、胡蝶舞、關陵王の舞などする様をも巧に細かに作り成し、奉侍の官女も此までの者は武家姿なるが、姿は錦の袷衣紫色の袴髪も繪元結にて結びたるにて一は座したる姿、一は立ちて髪の色を見たるを現はせるなり。外に長柄、楸柄の銚子の)(又本郷島島の岩崎臺守万島臺等皆金銀を鑲めたりといふ)(久彌男は先頃令嬢を擧げて、今面は其の初節句なるより駿河臺の岩崎家を初め、諸家より贈り來れるものを合せて一揃の雛壇を作れる由なるが、其の價は總て三千圓)回顧すれば明治の初年十二三年頃までの破壊時代には、人の雛壇をといふものさへわらずなりて、古き美術品と共に多く外人の買占に逢はんとせしが、其れ等の反動は漸く國運の氣

運を盛ならしめて、雛なども徐に再興し來り、今は殆ど昔の様になり歸り、嫁入道具の一として必數ふべき物と迄に至れり。

序にいふべきは、是は雛とは意味少しく異なるべけれども、又其の一種の流行とも見つべきは、先年醫學博士松本順氏の令嬢婚嫁の節、氏は自が幼時の面影を移したる抱人形を作りて持参せしめたるより始まりしか、上流社會にては其の兒女の遊ぶ人形に父母たる自己の幼時の面影を移したるが多し。

結婚論 (承前)

野本生譯

未婚者は、其の單獨なる事情の爲め、即ち、獨身であるといふ點に於て、屢、幸福なる場合がわ

る。彼れは、自己の爲めに、自己一人の計をなせばよいといふ點に於て、或は又、自らは、自らの主人にして、社會、邦土の法律の許す限りは、何處に行き、何事を爲すも、全く自由であるといふ點に於て、自分を慰むる事が出来るかも知れぬ。併し、自分は夫婦といふ全きもの、其の一半に過ぎないもので、其の生活には、必ず、何にか足らぬものがあつて、若し、其れが満たされたらば其の生活は、定めし、もそつと完全するであらうといふことを知て居る。又、假令、彼れ、事業に成功して、富、己れの手申にあるも、彼れと共に其の成功を喜ぶべき筈の或る者が欠けて居ることを自覺するに違ない。彼れは、又、何故、彼れが事に當て、其の全力を注ぐことが出来ないかを怪むであらう。かくて、遂に、自分をして、進んで

發奮努力せしむる爲めに、其の刺戟となすべき或物が、自己以外に、必要ではあるまいかといふ疑を起すに至るであらう、假令、財、豊かにして、衆人皆己れに媚び、友人雲の如く、歡樂、常に堂に滿つといへども、猶且、其の生活を圓滿ならしむべき或物の、不足して居るを感ずるであらう又、假令、自由に、其の好む所に旅行し、衣食住に、あらゆる贅を盡す事を得るも、彼れは、猶、其の日常の生活が他の人々より、却て、つまらなく、又情なく感ずるであらう。米國の金満家で、又、其國の大新聞の持主で、始終、旅へ出て居る金は遣ひ切れない程あり、何でも、己が欲するものは意の儘になるといふ有様で、諸邦に、立派な邸宅、別莊を構へ、遊船は更なり、馬なども、數多、飼て居るといふ、誠に何不自由なき身分の人

が、或る時、馬車を走らして行く途中、一人の知人が、其の最愛の妻と、二人の子供とで合乗をして、同じく、馬車を驅て來るのに摺れ違つた。其の時、此の金満家が、傍の友人を顧みて、「わの人の資産は、引括めたところで、予の一ヶ年の収入の半にも足りないが、夫れでも、我が今日の生活よりも、遙に幸福であらう」と言つたさうである。又、其の友人が、然らば、此の他に、君の友人で、君より幸福なる人ありやと、尋ねた時、「然なり、ジエームス、ゴルドン君ならん。彼れは、已が傍に良妻を有し、其の膝の上に、愛らしき小兒をのせて居るから」と答へたさうである。未婚者と結婚者との場合は、正に斯の様なものであらうと思ふ。

扱て結婚其物に就ての研究は、以上の説明によ

りて、充分であらう。是れに關する、六ヶ敷き、其の細目に亘りての議論は、元より別箇のものがあつた。併し、何處に何人も、他人の爲めに、所決することの出來ない一つの疑問がある。其は、別ではない、人が先づ、一女子を認めて、已が妻にしたいといふ意を起させるところの、其人の心其物である。「愛の指す所誤なし」といふ昔の格言は、其の格言の書かれた當時と同じやうに、今も、猶、其の眞理たることを失はない。然れど、多くの青年は、此の疑問を解決することが出來ないで居る。彼等は、神聖なる結婚、即ち夫れによりて、幸福を期すべき結婚は、愛に依るべきものであることは信じて居る。又恐らく、斯かる結婚を望み得べき婦女子は、彼等の眼中にあるので、且つ、彼等自ら、其の女子を愛するが如く感じて

居る。然るに彼等が其の女子を娶ることを躊躇する。而も、其の何故なるかは、其の當人達にも説明することが出来ない事がある。又同じ場合に、別の女子があつて、已れ自らは、其を愛しては居ないが、其の女子は、他の女子とちがひ、已に對して、多くの、處世上の改良、上進、即ち、已が業務上の便益、其他種々なる便宜を齎らす事が出来るといふやうな事を考へて居る。或は又、意中の女子を得ることが出来ても、其を娶るといふ場合になりて、両親の同意を得ることが出来ない事がある、其は、假令、公然に反對するのでなくとも、親としての、冷淡無情は、公然の反對よりも、更らに、一層冷酷で、殺生である。されば、彼等は、其を娶らんとすれど、両親を憚り、且つは又、友人の思惑、如何を心配し、遂に疑惑と混亂に了

てしまふのである。併し、何れも畢竟するに、彼等を引きつくる所の力の其の一方は、眞實なる心であるが、その他方は、唯、利害得失とか、斟酌、事情とかいふ間接的のものに過ぎないのである。女子の爲めに、徒らに、種々なる心配を爲して、是れ所謂、戀愛なりと、誤解するは、斯かる青年の常である。併し、戀愛には二心なき筈のものにて、其の二心あるは、單に「所得」を意味する一箇の俗望に過ぎない。決して、戀愛ではない。予は、或る青年は、單に、此の俗望の爲めに、結婚するといふことを公言するに憚らない。此處に、「所得」といふは、元より、金圓財物を指すのではない。凡べて、形而上の利得を意味するのである。金の爲めに、女を娶るは、人間が爲し得るところの、最醜、最劣の行爲である。男子は之れが爲め

に、墮落し、女子は、其の受くる所の冷遇の爲めに、萎靡してしまふ。多くの青年は、彼等が有せざる、或る特長とか、藝術とか、又は品格とかを備へて居て、之れが爲めに、人心を動かすといふやうな女子を娶らんと心懸けて居る。假令其の女子の才能とか、旅行の智識とか其の美貌とか、或は又、社交上の立ち振舞、化粧の巧拙、衣服の着こなし、其他、來客の接待振りなどである。青年の輩は、兎角、此様な女子を理想の妻として夢みて居るらしい。成程、此様な女子は、外觀、立派で、且つ、自分が、或る地位を得んが爲めには、大に助となり、又、常に、知己朋友を遇すること、が巧みであるかも知れぬ。而も亦、世間に向つて、充分、誇るに足ると思ふかも知れぬ。又實際、誇るに足るかも知れん。併し、自慢てふ虚榮心の満

足は、眞正なる心の満足とは違ふ、虚榮心の満足は、得ること易くして、而も又、容易く消えて仕舞ふ。虚榮の爲めに、妻を娶る者は、數年ならずして、其の家庭に、裝飾物以上の或る物が入用で、夫れが全く缺けて居ることを感ずるに違ない。何となれば、世に、一人にて、有用、裝飾の二者を兼備せる婦人は極めて少いからである。人若し、單に彼女は或る技能を有して居るからとか、又唯彼女よりも、此の女がよいからとか、或は、彼女には敬服すべき點があるからとか、又或は、同情に富んで居るやうであるからとかいふので以て、妻を娶らば、到底、幸福なる結婚を望むことは出来ぬ。此の様な、感情上の條件は、一として、眞實、幸福なる結婚を成立せしむべき要素とはならない。生涯の友となり、世に在る限り同棲して、

苦樂を共にし、良人の母には、其の娘となり、其の子には母となるべき大任ある女子は、更に、或る他の動機に因りて、青年の心を動かさしむるところのものでなければならぬ。即ち、眞實、戀愛的、愛情を起こさしむる所のものでなくてはならぬ。此の一片眞實の戀愛だにあらば、他は求めずして、悉く附隨して來るので、前に述べたる諸件は、其の一は勿論、仮令、數箇結合して居ても、決して戀愛を生ずることは出來ない。青年の妻らなくてはならぬ、即ち、娶るに安全なる女子は、己が思想を支配し、己が行爲を監督し、如何なる事を爲す場合にも、必ず、其の顔を顯すといふ風の婦人で、つまり、己が生涯の全部を支配するところのものでなくてはならぬ。言ひ換ふれば、一時も、其れなくては、淋びしさに堪えられず、活

きて居る空がないといふ様な女でなければならぬ。人々の娶るべきは正に斯の様な婦人である。されば、其の貧富、賢愚等は元より論するに足らないので、況んや旅行の智識をやである。即ち、彼れ、唯だ、愛情に富み、良人の勞苦に同情厚く、其の思想に合同し、又其の善良なる性格を信ずること深ければ、己に充分なのである此等が即ち、女子の特長とすべきもので、良人の全生涯を通じて、永遠、渝ることなきものは實に是れである。斯かる特長をこそ、良妻、賢母を造るに必要とすべきものである。成程、智識は、女子に必要なものには違ない。然れど、夫れよりも更らに、更らに、際限なく必要なるは、此の愛情である。仮令、人、世界第一の暗愚なる女子を娶るも、其の女子にして愛情だにあらば、冷酷、無情なる世界

第一の賢婦人を娶るよりも、遙に、幸福で、又遙に、惻いかなのである。人、壯年の時は、此の情を一笑に附して顧みない、然れど、晩年に及んで、始めて、其の重んずべきを覺り、曾て其の一笑に付し去りたるもの、後却て、其身に大なる助となるべきを悟るであらう

(未完)

いろく

さくら

盲杖櫻

播州明石町の裏手舊城跡のつゝなる丘の上に人丸神社といふあり、前に明石海峡をへたて、淡路島を望み、ゆきかふ真帆片帆幾百といふを知らず、幾千歳をや經たりけん磯馴松のかけに見えつかくれつ、さて社に詣て、石段のかたへに進めは

右手の方玉垣を結びめぐらして一もとの櫻の木ぞたてる。

榜していふ

昔筑紫に盲人ありはるゝ此社に詣で、

はのゝとまことあかしの神ならば

我にも見せよ人丸のつか

かくなんよみければたちまち二つの眼ひらきて始めて物を見るを得たり盲人こよなう喜ひてかれば力とたのみし杖は用なしとて廣庭にざし捨て去りぬしかるに其枝より枝葉生ひ茂りて來る春毎に花咲きぬれば名けて盲杖櫻といふ。

妙計

なにかしといへる紳士はかさを投せんとして郵便函のかたへに立てる折しも其友なる人來あはせたり、紳士の持てるはがきを見るに宛名は紳士自身

なり友なる人怪みてその名宛は御自身にあらすや
 何とてさるることし給ふそと問ふ、これ見給へとて
 文面を示すを見るに。

今夜某亭にて某氏送別の宴を張る來會せざる者
 は罰金として拾圓を科せらるべし

幹事より

とあり紳士曰くわれ今夜深更に及びて歸るも既に
 このはかさあり荆妻また余を咎めざるべしと。

「すみれ曰く……」

鶏卵を凍らする法

細かくしにる氷又は雪を皿に盛り食鹽をその半
 分はかり加へ交ぜ合せてこれに卵を埋め置けは三
 十分計にして凝結し外殻に裂目を生ず、これを取
 り出して殻を去れば庖刃にて切るともつぶれる事
 なし場合によりては面白き料理ならん。

これにてきり上げ申すべく候おもしろくはながきもよけれそ
 つまらぬ者をなかく書くほどつまらぬものはなし
 すみれ曰くには何なりともさんくさんかき下され度願上候
 さくら





學事集會

●女子高等師範學校 ▲今回私費地理歴史専修

科生四拾名、及家事専修科生二十四名を募集せり

前者は一昨年九月第一回生徒を入學せしめ、本年

三月卒業の由にてふ日何れも地方師範學校女子部

若くは高等女學校等の教員として夫々赴任すと聞

く、當科は今回新に外國語の科を加へ修業年限

を改めて二箇年とし、益々該科教員たる學識を收

得することを多からしめ、後者は三十二年七月第

一期卒業生を出し、何れも地方中等教育に従事し

て好成绩あり、入學志願者は兩科共に品行方正身體健全にして、修業年限四ヶ年の官公立高等女學校卒業生、若くは之と同等の學力を有し、年齢十七年以上三十年未満、夫を有せざるもの由、本年三月三十一日迄に願書を差出さば、四月上旬試験の上入學を許可せらるべしと。▲本年卒業す

べき見込の同校生徒は文科廿三名、理科十七名、地理歴史専修科卅四名にして卒業式は本月卅一日舉行せらるべしといふ。▲同校助教授廣瀬豐十郎

氏は、先月廣島縣高等女學校長に任せられたり。▲同教諭岡田光氏は外國語教授法研究の爲、米國に留學を命ぜられしが、先月廿二日午前十一時五

十分新橋を出發せり。

▲各女學校生徒募集 東京府第一高等女學校は、第一學年四十八名二學年三學年各補缺生募集入學

第一學年四十八名二學年三學年各補缺生募集入學

試験は四月一日二日、**▲同第二高等女學校**は、第一

學年に四十八名募集、入學試験は四月一日の由

▲同第三高等女學校は、一、二、三各年級に、七十人

つゝ募集の筈、**▲日本女子大學校**は來る四月の新

學期を以て、國文、家政、英文の三學部の一年級

英文豫備科の第一、第二年級、附屬高等女學校にて

は五學年を通して補缺生を募集し、出願の順序

により有資格者は無試験にて入學を許可する筈な

りといふ。**▲其他何れの學校**も、大低生徒募集中

なるが如し。

●保姆傳習所 先月を以て卒業の豫定なりし、

東京府教育會附屬保姆傳習所は、都合により尙本

月凡そ半ヶ月の見込を以て、延期したりといふ。

●私立足利幼稚園 同園は、本年一月開園せる

ものにして、目下女子高等師範保姆練習科卒業、

關すが子氏主任となりて、從事せられ居る由なる

か、園主は山越窓空氏にして、駿阿寺の學頭たり。

常に同地方の風俗純ならず、子女教養の効擧らざ

るを概し今回、自己所有の第宅を以て、幼稚園に

充て、關氏を招聘して、教養を依托せるなりとい

ふ。

●女子高等師範學校入學試験問題 本年一月行

はれし同校本科入學試験問題左の如し。

國語科問題

(二時間)

(注意) 文法の答と解釋の答とは別紙に認むべし

○文法

一、左ノ施線ノ部分ニツキテ、文法上ノ差異ヲ説ケ。

啼く鶯の聲すなり。

(イ) 今これを説明するなり。

(ハ) そこに入ありや。

(ニ) あな、たのみなき人のルヤ。

二、左ノ文ニ誤アラバ正セ。

(イ) 此品に手を觸るるべからず。

(ロ) かくと申せしかば、それにてよしと言はれし。

(ハ) 雪を戴く峰巒は雲表に聳へ、藍を流る湖水は樹林の間へ隠見す。

○解釋

神功皇后韓國をこゝむけ給ひしより以來國大に開け民ますく蕃りては教化の道なくてえあらぬ事なれば儒佛の教を採用し給へるも已む事を得ぬ理なりさるに儒佛の道開けずは今もなほ上代の儘ならむなごうれたむもさるることながら時勢は四時の遷るが如し夏日の葛冬夜の装いっで、一偏を固執せむ純一無慾の小兒をよこして名利の念熾なる若人を教へんさすも其の勞やいたづらならむ

○作文

(二時間) 將來の希望と覺悟との述べ。

(注意) 先、古ニ比シテ明治ノ御代ニ生レタル女子ノ幸福ヲ略説シ、次ニ己ガ將來ノ希望ト覺悟トヲ述ブベシ。

歴史科問題

(三時間)

(注意) 本邦史の答と東洋史、西洋史の答とは各別紙に認むべし

○本邦史

(一) 延喜の御世の有様につきて知れる所を述べし

(二) 左記の人々の事蹟を記せ

松下 禪 尼 林 子 平

(三) 明治四年に藩を廢して縣を置かれたる始末の大意を問ふ

○東洋史、西洋史

(一) 漢孝武帝の事業を記せ

(二) 清露間に締結せられたる尼布楚ツメク條約の要點を記せ支那史にある左の地名は今日の何處に當るや

落陽 蜀

(三) 十九世紀の初歐洲列國間に生つたる神聖同盟の性質を説明せよ

(四) 米國に於ける南北戦争の始末を記せ

(五) 左の人名に關する事蹟を略記せよ

マルチン、ルーテル、 Martin Luther.

フレイニン、 Franzbal.

漢文科問題

(二時間)

(注意) 毎字讀方の音訓に假名を付け別紙に意義を解釋すべし

問題一

清少納言老而家居屋宇甚陋郡署年少見之其貧窶憫笑之少納言自廢中呼曰不聞有買駿馬骨者哉笑者慚而去

其二

趙王倫嬖詔勒兵入宮逼晉帝禪位燕與皆爲痴相奴卒亦加爵位每朝會貂蟬盈坐時人語曰貂不足狗尾續

其三

具曰予聖誰知烏之雌雄

肉袒負荊

真纓衝雙

理科問題 (三時間)

(注意) 物理、化學、博物の答を各別紙に認むべし

○物理

(一) 何なり物體の重心とは云ふや

(一) 凹鏡の主焦點に一光源を置くときは其反射光は如何なる方向を取るや

○化學

(一) 炭酸瓦斯の製法及び性質を記せ

(一) 酸化、還元、潮解及び風化とは如何

○博物

(一) 子房下位花及び子房上位花の構造を記せ

(一) 有胚乳種子と無胚乳種子との別を問ふ其の各一例を擧げて之れを記せ

(三) 動物の呼吸作用によりて空氣を取るは生理上如何なる必要ありて然るか

(四) 人體の食物消化に關する器官及び其の各部の名稱を記せ

數學科問題

(三時間)

(一) 分母の相異なる分數を加ふるに之を通分する理由如何

(一) 英國金貨幣壹磅は純金の目方七、三二二(グラム)なり之を換算すれば幾幾圓となるか

(三) 左式の結果を小數に直せ

$$\left(\frac{11}{9} - \frac{3}{12} \right) \times \frac{1}{\frac{5}{44}}$$

$$\frac{17}{3} - \frac{2}{4} + \frac{2}{3} - \frac{3}{4}$$

(四)

旅入あり十五日間に百八十七里半を行く割合にて八十里を六日と四時にて歩ゆり云ふ此人毎日何時間づゝ歩みたるか

(五)

壹圓未滿の元金には利息を附せざることとして年利六分元金貳百六拾六圓の三年間に生ずる複利を求めよ

(六)

一つの角を二等分する直線上の何れの點を取るも二つの邊より相等しき距離にあることを證明せよ

(七)

梯形の平行なる二邊と高さとを與へて面積を求むる方法并に其理由を記せよ

(注意)

(三)に就きては運算を詳記し(四)(五)に就きては解法、運算、答を明記すべし

圖畫科問題

(一時間)

毛筆畫

練書 硯、筆

墨畫 菊

壹葉に畫くべし
壹葉に畫くべし

裁縫科問題

(三時間)

(一) 唐縮緬友禪大巾たけ一丈六尺七寸の用布にて三ツ身裁着物并に四ツ身裁被布各表一枚を普通寸法によりて裁たんとす然るときは其裁ち合せ方如何にして可なるか

右の圖解に各部の名稱及寸法を記入し且その積り方の算式をも示せ

與ふる所の布と糸とを用ひて七分の裙左右を縫ふべし但綿は省く

筆の雪

●天恩優渥 青森第五聯隊雪中行軍遭難の件一

たび天聽に達するや、悉くも直に侍從武官を遭難地へ御差遣相成り、特に優渥なる慰問の御詔を傳へさせられ、且つ夫々御菓子料を賜はりたるが、

今又承る處によれば、侍從武官の歸京覆奏あるや更に一層惘然に思召され 天皇 皇后兩陛下より更に厚き御弔慰金を賜るやに承はれり。

●四十萬圓の慰勞金 兵庫縣武庫郡西の宮の酒造家辰馬吉左衛門氏方の業務を主管せる、辰榮之助といふは今より四十五年前、先代吉左衛門の代に奉公し六十四歳の今日に至るまで、忠勤一日の如く最初二十石内外の醸造より、當時の醸造高二萬六千石の盛況に達するに至らしめ、其間辰馬家の財産八百五十餘萬圓を増加し、且つ本業の外に

海運業燐寸製造業を起して之を管理するなど、其功績甚だ大なるものなりしが、此頃老年の故を以て退隱を申出で、主人も愈々之を許可すると同時に、多年の功勞に酬ゆる爲め、三組の金盃に金四十萬圓を添へ慰勞として贈與したりといふ、主従ともに感心の至といふ可し。

●禿頭病豫防取締方に就て 再發せる禿頭病の豫防に就ては、府下各警察署に於ても男女性理髮業者の取締方を厲行なす由なるが、殊に女髮結の不潔なる櫛共を用ゐるを發見次第其取締をば嚴重にすべしといふ。

●傳通院の凍死者追弔會 小石川傳通院にては去る二十三日午後一時より青森凍死者追弔法會を執行し、神谷大周、清水信順、兩氏の視察演說并に奉納劍舞等ありたりといふ。

●傳通院の凍死者追弔會 小石川傳通院にては去る二十三日午後一時より青森凍死者追弔法會を執行し、神谷大周、清水信順、兩氏の視察演說并に奉納劍舞等ありたりといふ。

●我國の癩病患者 癩病は實に難症なるものな

るが、我國には四千五百萬人中に九十九萬人の系
統ありて三萬以上の患者あるも、獨逸にては五千
五百萬人中、僅かに十二人に過ぎず、豈に比較の
限にわらずやとは山根醫長の言、而して此病氣は
不淨場よりも布團よりも傳染するものなれば、普
通の人と病人と雜居するは危険千萬なり、されば
癩病盲啞等の患者を一院に收容する一大慈惠院を
設立するは、目下の急務なりと云ふべし。

(婦人衛生雜誌)

●有妻者は長命 獨逸の統計大家フイルツ博士

は、多年の間、材料を集めたる結果、結婚したる
人は獨身者より一般に長命なることを知り得たり
即ち氏の作れる統計表によれば、年齢三十歳より
七十歳迄の既婚者の死亡數は、同年齡の獨身者の

死亡數より少きこと五分の三にして、三十一歳を
經經したる獨身者の平均年齢は、五十八歳と十分
の六なれども、既婚者のそれは六十四歳と十分の
四なりと。

ドクトル、バッペンハイム氏の訃音

久しく

ベルリンフレベル會、及獨乙フレベル會の會長
として、幼稚園教育に熱心盡力せられたるバッ
ンハイム教授は、先頃遂に永眠に就かれたりとの
ことなり。全教授は中々懇篤親切なる方にて、特
に我國より留學せる人々など、世話に預ること多
かりしとのことなり。

地方通信

▲高知通信

在高知通信員

●當地の女子教育は近來頗に盛況を呈し、從つて

女子教育者も少からず、縣下唯一の教育會中には

女子部の設ありて、年々一回の總集會を催し來り

候が、之が會員も随分少からざる様子に御座候。

●生徒は目下千四百五十名位なるべく、何れも市内

の各學校に通學致し居り候。されば公立の學校と

ては唯一の高等女學校あるのみなれば、年々志望

者に満足を與ふること能はず、止むを得ず、撰拔

試験によりて其幾分を收養致し居り候次第に候。

●されば私立の女學校も多く、小なる裁縫傳習所

を加へなば、殆んど二十餘ヶ所にも上らんかと存

じ候。

●其中主要なるものは、高知實業女學校、高知成

女學舎、中村女子手藝傳習所、勝賀瀨女藝傳習所

高知女子英語學會、宮内裁縫傳習所、佛教婦人會
などに御座候。

●服装は、高等女學校生徒のみ、海老茶袴を着用
いたし、其他は何れも普通の服装に御座候、され
ど何れも極めて、質粗なる點に於ては、同一に御
座候。

●尙次號よりは、各學校について、尙悉しく御報
導申し上げべく候。

▲長野通信

長野 飯島 八千溪

●長野小學校には十五ヶ年以上勤続者が三名も
います一月廿八日に此等三名の爲めに市役所、學
校職員等が主動者と爲りて祝賀會を開き紀念品を
贈りました、今其姓名を擧ぐれば

も、漸く通過して、本月よりは、聊か、長閑さ心地の致さるべく、一雨毎に拳の如く伸び来る青山の藤を摘む田舎の愉快、左こそと存じられ候折柄、今日此頃の東都の有様ニツ三ツ御報導致さんかと存し候

▲先月は、例の第五師團兵雪中大椿事の噂、近來の大慘事として、至る所に喧傳せられ候、思へば憫れの事どもに候、一朝事ある日、彈丸雨注の間に強敵と相見えて、引き組むべき丈夫の、何事ぞや、東奥の果に、無情の風雪に襲はれて斃れ候事残念の程思ひやられ候、あはれ、春は來りて雪は跡なく消ゆとも、二百有餘の忠魂義魄は、永遠に彼地に消え申すまじく、八甲田山の邊り千古に、暗澹の影をといひべくと存し候。

▲例になき本年の寒さ、數十年來其比を見ずと、

さる物知りの老人の申され候。さればにて候か、先月來當地に於ては、風邪、デフテリアの流行甚しく、知る人毎に殆んど風邪にかゝらぬはなく、デフテリアは、専ばら幼児を襲ひ候由に御座候。

▲梅の音信は、先月末の方より、ちらほら傳へられ候。湯島境内の梅花は、先月十六日頃一輪二輪笑ひかけ候ひしが、昨今は満開に近く候、臥龍、江東の梅、蒲田大森の梅、さては池上大宮の梅は此頃より一週間ほどは見頃に候、要するに、もはや塾居籠城的の冬は過ぎて、本月より四五月にかけては、所謂花のお江戸となり申すべく、こゝ三ヶ月は當に東京人士の大浮れの時代に候。

▲本月は學年の終りに候ものから、卒業生は、中々忙しさと樂しさと極限かと存じられ候。誰やらの言葉に、人間の最も愉快なる時は、始めて結

婚せし時と學校卒業證書を握りたる時とであると思はれしが、願くは、どこまでも此時の心地を以て一生を送る心懸けを致し度き事と存じ候。

▲諸學校とも生徒入學募集の廣告を出し候。序に申し上げ候、新文と申す雑誌に昨年の教育界の概観を出され候中に「明治卅四年の女子教育は、進歩といへば進歩はしたが、要するに皮相の進歩形式の發達に過ぎない、女學校も大に増設せられたが、併し其中に錢儲け主義で以て、生徒を集めて月謝さへ取れば宜い、と云ふ學校も出來た云々」ぞ記され申候。なる程觀じ來れば、此種類の女學校も之なきにはあらざるべく、地方に居て、東京へ入出れば何處の學校でも、皆立派なものと思ひ得て万一こんな學校へでも御入學なさる様の事あらば、夫こそ大變の事と存じ候。

▲久しく本會々員として盡力せられし、廣瀬豐十郎君は、今回廣島縣高等女學校長として客月赴任致され候。同縣の女子教育今後頗る見るべきものあらんと樂しみて相待ち居り候。

▲本會々員岡田光子君も、愈先月廿二日横濱出帆洋行の途に上られ候。同君の秀才は万人の認むる所、歸朝の後は、我國外國語教授方法の上に、偉大なる影響を與へらるゝこと、今日より囑望致し居り候。

▲申し上げたき事數限りなく候へども、つまらぬ事に貴重之餘白をと存じ、後は後便に譲り候。尙折々は、面白き地方のお話しも何度く候。以上

新刊紹介

●菅公傳 全一冊 中村秋香氏著

婦人子ども第二卷第三號

菅公一千年祭舉行につき、同公の傳の著述せられしもの一二に留
らず、本書も其一なり。四十八頁に過ぎざる小冊子なれども、著
者流麗の筆は、實に菅公を盡き盡して、紙上に活躍たらしむ。加
ふるに挿畫の美しき、印刷の鮮なる、小學校賞品などには最適當
なるべし。(定價七錢 賣捌所 東京神田區今川橋通北 誠之堂)

新刊雜誌

●を附したるは
婦人雜誌なり

- ▲大八洲雜誌 卷一八七 大八洲館
- ▲日本婦人 第二七號 帝國婦人協會
- ▲衛生談話 第一三號 通俗衛生茶話會
- ▲教育時論 第六〇四、五、六號 開成會社
- ▲教育實驗界 第九卷第二、三號 育成會社
- ▲婦女新聞 每號 同社
- ▲苦學界 第一〇號 苦學社出版部
- ▲山梨教育 第八六號 同社
- ▲學生俱樂部 第二卷第五號 育成會社
- ▲女子の友 第一〇八、九號 東洋會社
- ▲大阪府教育會報 第一八七號 同會社
- ▲東京市教育時報 第一七號 同會社
- ▲教育學術界 第四卷第四號 教育學術研究所
- ▲牟婁新報 每號 牟婁新報社
- ▲ひんな 第二卷第二號 大日本女學會
- ▲健康乃菜 第九號 全社

七十八

- ▲家庭 第二卷第二號 全發行所
- ▲新文 第二卷第一號 言文一致會
- ▲日本の小學教師 第四卷三八號 國民教育社
- ▲うらにしき 第一一二號 尙綱社
- ▲六合雜誌 第二五四號 日本ゆにてりあん弘道會
- ▲考古界 第八、九號 考古學界
- ▲婦人新報 第五七號 全社
- ▲婦人衛生雜誌 第一四七號 私立大日本婦人衛生會
- ▲福島教育 第八一號 全社
- ▲上野教育會雜誌 第一七二號 全會事務所

謹告

御寄贈の新刊書籍雜誌等には、必らず
本會宛にて御發送下されたく、往々取
り紛れ候事有之に付き念の爲め申し上
げ置き候

會 報

第二十四常會 二月一日午後一時三十分より女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開會せり、中村

主幹の開會の辭續て尺秀三郎君の話の仕方につき演説ありそれより會員野口ゆか子姉の神戸幼稚園

參觀の話山越恐空君の談話あり暫時休憩の後保姆合唱の唱歌をなし午後五時洋々の間に閉會せり本

日は折あしく雨天にて、道路の泥濘も亦甚しかりしに、會員の熱心なる來會者三十五名に及び其

他に傍聽者拾數名なり。

寄附

一金五圓也

右會員山越恐空氏より本會に寄附せらる、茲に謹

しんで氏の厚意を謝す

會員高浦丈雄君客月中旬より肺炎に罹られしが藥石効なく遂に其月廿三日逝去せらる、茲に謹しんで弔意を表す

入 會

東京ノ部

東京府女子師範學校
麻布幼稚園
神田區淡路町一ノ一

東京府第一高等女學校
本郷區春木町二ノ二三小杉氏方

麻布區飯倉片町二七
女子高等師範學校寄宿舎

地方ノ部

愛媛縣宇和島高等女學校
東京府下青梅小學校附屬幼稚園
仙台市東二番町

朽木縣足利町鑛阿寺
鳥取市立川町三ノ八一

神奈川縣鎌倉字小町
香川縣三豐郡觀音寺村觀音寺小學校

千葉縣千葉郡中野郵便局區内三洲小學校内

土川 五郎

千田 孝壽

小谷野 かれ

岡本 ちか

新海 ふみ

菱沼 こなつ

赤江 よね

東條 順

長谷川 春

野副 さよ

山越 忍空

尾崎 萬龜

鶴田 ゆい子

大西 永太郎

小幡 たみ子

婦人の子と第二卷第三號

神奈川縣高座郡松林村菱沼太田市五郎方
肥後國菊池郡陣内村
仙臺市琵琶首町

改姓

轉居

門脇事

東京市小石川區久堅町四八
同 大和町二七へ
同 神田區駿河台北甲賀町一七清水方へ
同 日本橋區蠣壳町一ノ四平井彌七方
神奈川縣橋樹郡子安村三三〇七へ
山口縣熊毛郡寶積へ
三重縣山口岩淵町海野たつ方へ
石川縣金澤市下本多町番町二へ
群馬縣高崎幼稚園へ
大坂市南區灘波元町一ノ五三六澤須策方へ
岡山縣師範學校附屬幼稚園へ
香川縣綾歌郡阪出町阪出幼稚園へ
三重縣四日市江田町三四六西脇又作方へ
丹後國加佐郡舞鶴尋常高等小學校幼稚園へ
前橋市石川町六へ
香川縣綾歌郡宇多津今市へ
栃木縣足利町足利幼稚園へ

平岩 繁治
合志 章子
早川 ちやう

加藤 せつ

關口 たけよ
師岡 伸
矢野 ふさよ
林田 もと
福島 ちか
木原 いさ
酒井 冬
山田 みつ
富岡 むめ
吉田 まさ
田邊 春
中川 よし
中澤 よし
海野 きみの
野村 きん
澤村 きみ子
關 すが

京都市上京區油小路城巽幼稚園へ
北海道石狩國上川郡旭川町宮下通十八ノ左三號 儀 俄 富 美

會費領収は紙數の都合により次號に譲
り候間、御承知相成り度く候。

尙會務整理の都合上、會費未納の諸君
諸姉は至急御送附相成り度く候。

フレイベル會規則

- 第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレイベル會ト稱シ東京ニ置ク
- 第三條 會員ヲラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ提出スベシ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達セシガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ、
 - 一 總會 毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、保育參考品幼兒成績物展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲナス
 - 會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ
 - 一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、協議、實驗等ヲナス
 - 一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
 - 一 雜誌發行 毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス
 - 一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 會長 一人 會務ヲ總理ス
 - 副會長 一人 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス
 - 幹事 十人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 - 評議員 若干人 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
- 第八條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第九條 主幹ハ會長ノ特選トス
- 第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ケ年トス
- 但シ毎年半数ヲ改選スルモノトス
- 第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應ヒ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルコトアルベシ
- 第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

今般當校ニ於テ私費地理歴史專修科生四拾名私費家事專修科生二十四名ヲ募集ス入學志願者ハ本年三月三十一日迄ニ願出ヅベシ尙詳細ハ二月十日ノ官報廣告欄若クハ當校ニ就キ承知スベシ

明治卅五年 月 女子高等師範學校

○女生徒募集

三月一日 始業

- 女禮本科
- 女禮速成科
- 女禮理論
- 女禮技藝科
- 割烹本科
- 茶道、活花

右諸學科専門講師ヲ聘シテ教授ヲ仰グ
 ○割烹、女禮トモ兩科又ハ一科專修ゾ
 許ス詳細ハ規則書ニ在リ

主任 本邦禮節家元松岡止波子刀自門人 中村梅子
 本邦割烹家元石井治兵衛翁門人

本郷區眞砂町拾三番地

實用女禮教場

新刊報告

高等師範學校訓導遊佐誠甫氏編

學業操作 考查必携

全一冊規

定價 金十八錢
郵稅 金四錢

○附錄 小學校令及施行

生徒の學業操作を査定し老慮することは教育上の要務にして一日も忘るべからず然れども其法にして密に過ぐれば繁雜厭ふべくして持續すべからず簡に過れば疎略捕ふべきなくして用を欠くに陥るれば簡便にして明確なるべく行ひ易くして利する所多からんこと今日教育者の一般に望む所なり此書は著者が多年經驗の結果を同職諸君に分たんとする好意を出でたるものにして學業及操作の考查に關し目的各教科及び學業操作の四項に分ちて説明し四五の府廳の右實施例を參考に掲げ以て兒童日々の學業操作の考查を全からしめんとしたるものなりされば之に依て勞を減じて功を收むることとは勿論卷末に附録として小學校令及施行規則を添へたるを以て萬事に便利尠からざるものと云ふべし苟も成績考查の正鵠を得兒童教育の功を奏せんとする人は一本を座右に供せられよ

高等師範學校教授
長尾楨太郎先生校
古川喜九郎君著

國語綴リ方辭典

全一冊 製本優美
定價金十錢
郵稅金二錢

本書は著者が國語綴方を教ふる者及之を學ぶ者のために特に著されしものにして書中を分ちて「國語假名遣」「新定字音假名遣」「類似の文字」「誤り易き熟語」「同訓異音の字」の六門とし之に附するに美辭麗句集を以てす而して是に一々平易簡明なる解釋を施し且各門五十音別としたれば搜索に便なるは勿論國語漢字の使用法は一目の下に瞭然たりされば小學校中學校高等女學校及師範學校の教師學生諸君はもとより苟も文章を綴らんとする者は必ず一本を備へざる可からざるの寶典なり尙又本書は筆裁優美にして代價低廉なれば學校に於て生徒に與ふべき賞品としては恐らく此の右に出づるものなかるべし

發行所

東京市日本橋區本石町三丁目二十二番地

金昌堂

見よ!! 近世の教育史を知らんと欲するものは!!
見よ!! 近世の道學史を知らんと欲するものは!!
見よ!! 近世の神道史を知らんと欲する者は!!!
東京帝國大學文科大學長井上哲次郎先生序
高等師範學校助教授法貴慶次郎氏編

山崎闇齋派之學說

全一冊 定價金七十錢 郵税金八錢 近刊

○山崎闇齋傳及其學派
は先生一家の系譜一代の詳傳のみならず先生の道學並に信念の系統傳播を明にし派中諸家を傳して洩すなく

○山崎闇齋の教育倫理說
は先生一代の思想道念主義好尚を明にし又其人物養成意見を詳述して餘蘊なく

○山崎闇齋の宗教哲學
は先生一生の信仰悟道を明にし其蘊奧極致を開き更に其敬神尊王愛國忠孝論を評論して面目紙上に躍如たり

見よ!!! 江湖の諸君子!!!
菅に斯道研鑽の諸君子を裨益するのみならず苟も一片風教に志あり道學に志あり將又育英に従ひ教導に關する人一讀再讀を措むなくば多々益々裨益する所あらん

發 兌

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

金 昌 堂

全一冊 近刊

教育實際ニ應用シ心理學

高等師範學校訓導富永岩太郎君著

(近刊) 四六形美本 正價金四十錢 郵税金六錢
此書は國民の備忘に供せんが爲に日常必須の事項を摘録したもので國民としての普通の知識を得んには恰當の冊子である殊に國民教育の任を負ふ所の人にはこれによりて處世の務を明にすることは勿論學生をして國憲を重んじ國法に遵ふ所の民たらしむるであらふといふことは信じて疑はぬこれ本堂が特に編者に乞ふて出版する譯である此廣告を御覽なされた方は是非一本を座右に置かれんことを希望する

國民教科資料

福岡縣視學官 長倉雄平先生序
三重縣師範學校教諭 水谷兵四郎先生校
三重縣師範學校訓導 入澤 博先生編

